



Adobe

LiveCycle ES 8.x から LiveCycle™ ES2 への アップグレード (WebLogic® 版)

2010 年 9 月 24 日

Adobe® LiveCycle™ ES2

バージョン 9

© 2010 Adobe Systems Incorporated and its licensors. All rights reserved.

LiveCycle ES 8.x から Adobe® LiveCycle™ ES2 へのアップグレード (WebLogic® 版)
2010 年 9 月 24 日

This guide is licensed for use under the terms of the Creative Commons Attribution Non-Commercial 3.0 License. This License allows users to copy, distribute, and transmit the guide for noncommercial purposes only so long as (1) proper attribution to Adobe is given as the owner of the guide; and (2) any reuse or distribution of the guide contains a notice that use of the guide is governed by these terms. The best way to provide notice is to include the following link. To view a copy of this license, visit <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>.

Adobe, the Adobe logo, Adobe Acrobat, FrameMaker, LiveCycle, PageMaker, and PhotoShop are either registered trademarks or trademarks of Adobe Systems Incorporated in the United States and/or other countries. Linux is the registered trademark of Linus Torvalds in the U.S. and other countries. Microsoft, SharePoint, and Windows are either registered trademarks or trademarks of Microsoft Corporation in the United States and/or other countries. Oracle, Sun, Solaris, and Java are trademarks or registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. UNIX is a registered trademark of The Open Group in the US and other countries. All other trademarks are the property of their respective owners.

Adobe Systems Incorporated, 345 Park Avenue, San Jose, California 95110, USA

目次

このドキュメントの内容.....	6
1 概要	10
LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイについて	10
アップグレードについて	11
LiveCycle のアップグレード方法	11
デプロイメント後のアップグレードタスク	11
LiveCycle ES2 を設定およびデプロイするためのタスクの選択	11
インストール、設定およびデプロイチェックリスト	12
2 LiveCycle ES2 モジュールのインストール.....	13
インストーラの確認.....	13
製品ファイルのインストール	14
Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへの インストール.....	15
JAVA_HOME 環境変数の設定	15
LiveCycle ES2 のインストール	15
LiveCycle Configuration Manager を実行してアップグレードするための準備.....	17
アップグレードのための Connectors for ECM の準備.....	17
エラーログの表示.....	18
次の手順.....	18
3 LiveCycle ES2 をデプロイするための設定.....	19
LiveCycle Configuration Manager の概要	19
スケジュール済み呼び出しのアップグレード	20
LiveCycle Connectors for ECM のアップグレード.....	20
サーバークラスタでの Content Services ES2 へのアップグレード	20
LiveCycle ES2 の設定、デプロイおよび LiveCycle ES2 へのアップグレード	21
EAR ファイルの手動デプロイメント.....	32
EAR ファイルのアンインストール.....	33
次の手順.....	34
4 デプロイメント完了後の作業.....	35
アプリケーションサーバーの再起動	35
日付、時刻およびタイムゾーンの設定	36
デプロイメントの確認.....	36
LiveCycle 管理コンソールへのアクセス	36
デフォルトのパスワードの変更	37
ログファイルの表示	37
LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール	37
Java Messaging Service の削除.....	37
モジュールの Web アプリケーションへのアクセス.....	38
Workbench ES2 へのアップグレード	39
Rights Management ES2 へのアクセス	39
User Management へのアクセス.....	40
LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定	40
環境変数の設定.....	41
HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定	42

Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定.....	42
Acrobat Professional の設定.....	42
マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定.....	43
Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには.....	44
PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加.....	45
LiveCycle 以外のアプリケーション.....	45
Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加.....	45
OpenOffice スイートへの新しいフォントの追加.....	46
その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加.....	46
HTML から PDF への変換の設定.....	46
HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート.....	46
Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する.....	47
ネットワークプリンタクライアントのインストール.....	48
監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定.....	49
Forms ES2 キャッシュのリセット.....	50
LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定.....	50
LiveCycle 7.x からアップグレードする場合の考慮事項.....	51
クライアント JAR ファイルの再パッケージ化.....	52
FIPS モードの有効化.....	52
HTML 電子署名の設定.....	53
Document Management サービスの設定.....	53
Connector for EMC Documentum サービスの設定.....	53
Connector for IBM FileNet サービスの設定.....	57
SharePoint クライアントアクセスの設定.....	65
share.war ファイルの取得と編集.....	65
share.war ファイルのデプロイ.....	66
IPv6 モードでの CIFS の有効化.....	66
contentservices.war ファイルの編集.....	66
Connector for IBM Content Manager の設定.....	67
Business Activity Monitoring ES2 のアップグレードおよびデプロイ.....	70
アップグレード後の作業ファイルの削除.....	71
システムイメージバックアップの実行.....	72
LiveCycle ES2 のアンインストール.....	72
5 トラブルシューティング.....	73
A 付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール.....	74
LiveCycle ES2 のインストール.....	74
エラーログ.....	76
コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール.....	76
次の手順.....	77
B 付録 - LCM コマンドラインインターフェイス.....	78
操作の順序.....	78
コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル.....	79
LiveCycle ES (8.x) コマンドのアップグレード.....	80
(自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) JBoss のシャットダウンコマンド.....	80
(自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) GDS の移行コマンド.....	80
(自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) データソースの移行コマンド.....	80
7.x 互換レイヤーの適用コマンド.....	81
LiveCycle ES (8.x) EAR ファイルからの情報の抽出コマンド.....	82
7.x 互換レイヤーのデプロイ.....	82
移行する LiveCycle ES (8.x) フォームテンプレートの取得コマンド.....	83
LiveCycle サーバーのアップグレードコマンド.....	85

一般的な構成コマンド	87
共通のプロパティ	87
LiveCycle の構成プロパティ	89
アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ	92
LiveCycle のデプロイプロパティ	93
LiveCycle の初期化プロパティ	94
BAM の初期化プロパティ	94
LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ	94
コマンドラインインターフェイスの使用	95
LiveCycle の設定 CLI の使用	95
アプリケーションサーバーの構成 CLI の使用	95
LiveCycle のデプロイ CLI の使用	95
LiveCycle の初期化 CLI の使用	96
Business Activity Monitoring の初期化 CLI の使用	96
LiveCycle コンポーネントのデプロイ CLI の使用	96
アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用	96
データベース接続の検証 CLI の使用	97
アプリケーションサーバー構成の検証 CLI の使用	97
LiveCycle サーバーの検証 CLI の使用	97
LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用	97
使用例	98
エラーログ	98
次の手順	98

このドキュメントの内容

このドキュメントは、Adobe LiveCycle ES (Enterprise Suite、バージョン 8.x) から LiveCycle ES2 (バージョン 9) へのアップグレードの学習に役立つ情報を提供するリソースの 1 つです。

このドキュメントの内容

このドキュメントでは、次のモジュール (LiveCycle ES ではソリューションコンポーネントと呼ばれていました) を Microsoft® Windows®、Linux® および Sun™ Solaris™ でアップグレードする方法と、これらのモジュールを Oracle WebLogic Server® にデプロイする方法について説明します。

- Adobe LiveCycle Barcoded Forms ES2
- Adobe LiveCycle Business Activity Monitoring ES2
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet
- Adobe LiveCycle Content Services ES2
- Adobe LiveCycle Digital Signatures ES2
- Adobe LiveCycle Forms ES2
- Adobe LiveCycle Foundation
- Adobe LiveCycle Output ES2
- Adobe LiveCycle PDF Generator ES2
- Adobe LiveCycle PDF Generator 3D ES2
- Adobe LiveCycle Process Management ES2
- Adobe LiveCycle Reader Extensions ES2
- Adobe LiveCycle Rights Management ES2

LiveCycle ES2 にアップグレードする場合、[LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ](#) ドキュメントを参照する必要はありません。このドキュメントと『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』および『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(サーバークラスター\)](#)』に、LiveCycle ES (8.x) を LiveCycle ES2 にアップグレードする際に必要なすべての情報が含まれています。

注意： LiveCycle ES (8.x) では登録していなかった LiveCycle ES2 モジュールをライセンス登録する場合は、使用しているアプリケーションサーバー版の『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』および [LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ](#) ガイドにある、新しいモジュールの設定についての適切な節を参照してください。

このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、LiveCycle ES (8.x) コンポーネントのアップグレードを行う管理者または開発者を対象にしています。このガイドで扱う内容は、J2EE アプリケーションサーバー、Linux、Microsoft Windows または Solaris オペレーティングシステム、MySQL、Oracle®、IBM DB2® または SQL Server データベースサーバーおよび Web 環境に関する十分な知識がある読者を想定しています。

このドキュメントで使用する表記

このドキュメントで使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

名前	デフォルト値	説明
[LiveCycleES2 root]	Windows : C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥ Linux および UNIX : /opt/adobe/adobe_livecycle_es2/	すべての LiveCycle ES2 モジュールで使用するインストールディレクトリ。このディレクトリには、LiveCycle Configuration Manager、LiveCycle ES2 SDK およびインストールされた各 LiveCycle ES2 モジュールが (製品マニュアルと共に) サブディレクトリに分かれて格納されています。このディレクトリには、サードパーティのテクノロジーに関連したディレクトリも含まれます。
[appserver root]	WebLogic Server 10g (Windows) : C:¥bea¥wlserver_10.3¥ WebLogic Server 10g (Linux および Solaris) : /opt/bea/wlserver_10.3 WebLogic Server 11g (Windows) : C:¥Oracle¥Middleware¥wlserver_10.3¥ WebLogic Server 11g (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3	LiveCycle ES2 サービスを実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。
[server name]	WebLogic Server の server1	アプリケーションサーバーで設定されているサーバーの名前。
WL_HOME	WebLogic Server 10g (Windows) : C:¥bea WebLogic Server 10g (Linux および Solaris) : /opt/bea/ WebLogic Server 11g (Windows) : C:¥Oracle¥Middleware¥ WebLogic Server 11g (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/	WL_HOME 環境変数に指定されている、WebLogic Server のインストールディレクトリ。

名前	デフォルト値	説明
[appserverdomain]	WebLogic 10g Server (Windows) : C:¥bea¥user_projects¥domains¥ base_domain¥ WebLogic 11g Server (Windows) : C:¥Oracle¥Middleware¥user_projects¥ domains¥base_domain¥ WebLogic 10g Server (Linux および UNIX) : /opt/bea/user_projects/domains/ base_domain/ WebLogic 11g Server (Linux および UNIX) : /opt/Oracle/Middleware/user_projects/ domains/base_domain/	WebLogic Server で設定したドメイン。
[dbserver root]	LiveCycle ES2 データベースサーバーがインストールされている場所。	データベースタイプとインストール時の設定によって異なります。

このドキュメントに記述されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに当てはまります (Linux および UNIX® では、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

関連情報

次の表に、LiveCycle ES2 についての詳細情報の参照先を示します。

情報	参照先
LiveCycle ES (バージョン 8.0) および Update 1 (バージョン 8.2) から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備。	LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備
LiveCycle ES2 およびモジュールに関する一般的な情報	LiveCycle ES2 の概要
Adobe LiveCycle ES2 (Enterprise Suite) リリースの新機能	LiveCycle ES2 の新機能
LiveCycle ES2 の用語	LiveCycle ES2 用語集
LiveCycle ES2 に統合できる他のサービスや製品	Adobe デベロッパーセンター
LiveCycle ES2 モジュール	LiveCycle ES2 (Enterprise Suite)
Adobe LiveCycle Workbench ES2 のインストール	Installing Your Development Environment
LiveCycle ES2 の管理タスクの実行	LiveCycle ES2 管理ヘルプ
LiveCycle ES2 に使用できるすべてのマニュアル	LiveCycle ES2 ドキュメンテーション
LiveCycle ES2 リリース情報および製品に加えられた最新の変更	LiveCycle ES2 リリースノート
現在のバージョンに関するパッチアップデート、テクニカルノートおよび関連情報	LiveCycle テクニカルサポート

LiveCycle ES から LiveCycle ES2 にアップグレードするには、ハードディスクに LiveCycle ES2 ファイルをインストールした後、LiveCycle Configuration Manager ツールを使用して、アプリケーションサーバーに LiveCycle ES2 を設定し、アップグレードしてデプロイする必要があります。

この節の情報は、LiveCycle ES2 のアップグレードプロセスを、インストール、設定およびデプロイプロセスとの関係も含めて理解するのに役立ちます。

1.1 LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイについて

LiveCycle ES バージョン 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードは、LiveCycle Configuration Manager で行います。アップグレードに固有のタスクは、設定およびデプロイメントプロセスにシームレスに統合されています。

LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイには、次のプロセスが含まれます。

インストール：インストールプログラムを実行して LiveCycle ES2 をインストールします。LiveCycle ES2 をインストールすると、必要なすべてのファイルが、使用するコンピュータ上の 1 つのインストールディレクトリ構造内に配置されます。デフォルトのインストールディレクトリは C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2 (Windows) または /opt/adobe/adobe_livecycle_es2 (Linux または UNIX) ですが、これ以外のディレクトリにファイルをインストールすることもできます。このドキュメントでは、デフォルトのインストールディレクトリを [LiveCycleES2 root] と呼びます ([「LiveCycle ES2 モジュールのインストール」\(13 ページ\)](#) を参照)。

設定およびアセンブリ：LiveCycle ES2 の設定では、LiveCycle ES2 の動作方法を決定する各種の設定を変更します。製品のアセンブリでは、設定の指示に従って、すべてのインストール済みコンポーネントがデプロイ可能な EAR および JAR ファイルに配置されます。LiveCycle Configuration Manager を実行して、デプロイメント用コンポーネントの設定とアセンブリを行います ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(19 ページ\)](#) を参照)。複数の LiveCycle ES2 モジュールに対して同時に設定およびアセンブリを行うこともできます。

アプリケーションサーバーの設定：LiveCycle Configuration Manager でアプリケーションサーバーを設定することができます。アップグレードの環境を準備する際に既に複数の設定タスクを実行しましたが、Java 仮想マシン (JVM) 引数の設定、データソース接続の設定およびタイムアウト値の設定など、LiveCycle ES2 のインストール後に行うタスクがさらにいくつかあります。これらのタスクは手動で実行することもできます。手順はこのドキュメントの [「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(19 ページ\)](#) で説明しています。

デプロイ：製品のデプロイでは、アセンブリされた複数の EAR ファイルといくつかの補助ファイルを、LiveCycle ES2 ソリューションを実行する予定のアプリケーションサーバーにデプロイします。複数のモジュールを設定およびアセンブリした場合は、デプロイ可能なコンポーネントがデプロイ可能な EAR ファイル内にパッケージングされています。また、コンポーネントおよび LiveCycle ES2 アーカイブファイル (LCA) は、JAR ファイルとしてパッケージングされています。LiveCycle Configuration Manager によって、EAR ファイル、コンポーネントおよびアーカイブファイルがアプリケーションサーバーに自動的にデプロイされます。

LiveCycle ES2 データベースの初期化：データベースの初期化では、User Management およびその他のコンポーネントで使用されるテーブルが作成されます。LiveCycle Configuration Manager は、デプロイメントプロセスの実行後に LiveCycle ES2 データベースを初期化します ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(19 ページ\)](#) を参照)。

注意： LiveCycle ES (8.X) データベースを LiveCycle ES2 用に初期化する必要があります。この手順によって、既存のデータが損害を受けることはありません。

1.2 アップグレードについて

LiveCycle Configuration Manager でアップグレードオプションを選択した場合、LiveCycle Configuration Manager では、LiveCycle ES (8.x) 設定からの必須データの移行や、秘密鍵証明書の移行などのアップグレードタスクを実行します。また、アップグレードプロセスでは、LiveCycle ES (8.x) のアップグレードバージョンに対して下位互換性のサポートも提供されます。アップグレードプロセスの実行中、LiveCycle ES (8.x) システムに関する情報の入力が必要とされます。

1.2.1 LiveCycle のアップグレード方法

LiveCycle ES (8.x) から LiveCycle ES2 のモジュールにアップグレードするには、次のタスクを実行します。

1. アップグレードのための環境の準備。
2. LiveCycle ES2 製品ファイルをインストールします。
3. LiveCycle Configuration Manager を実行して、設定、アップグレードおよびデプロイメントプロセスを開始します。このプロセスには次の手順 (以下参照) が含まれます。
4. (オプション) LiveCycle ES2 EAR ファイルに互換レイヤーを適用します。互換レイヤーは、LiveCycle 7.x を使用して開発されたカスタムアプリケーションをサポートする、推奨されない Enterprise JavaBeans (EJB)、クラス、サーブレットおよび CORBA API で構成されており、これらの従来のアプリケーションが引き続き LiveCycle ES2 で動作するようにします。
5. LiveCycle ES (8.x) の必須データを移行します。

1.2.2 デプロイメント後のアップグレードタスク

アップグレードおよびデプロイメントプロセスの完了後、LiveCycle ES (8.x) のプロパティを完全に LiveCycle ES2 に移行して、LiveCycle ES (8.x) クライアントアプリケーションが LiveCycle ES2 で実行されるようにするために、いくつかの手順を手動で行う必要があります ([「デプロイメント完了後の作業」\(35 ページ\)](#) を参照)。

1.3 LiveCycle ES2 を設定およびデプロイするためのタスクの選択

LiveCycle ES2 のインストール完了後、LiveCycle Configuration Manager を実行して、次のような各種タスクを実行することができます。最初に実行するのは、以前のバージョンの LiveCycle ES (8.x) から LiveCycle ES2 へのアップグレードです。アップグレードを実行した後に、LiveCycle Configuration Manager の以下のタスクを実行することができます。

- アプリケーションサーバーにデプロイするために EAR ファイルの LiveCycle ES2 モジュールを設定する
- LiveCycle ES2 をサポートするようにアプリケーションサーバーのプロパティを設定する
- アプリケーションサーバーの設定を検証する
- LiveCycle ES2 の EAR ファイルをデプロイする
- LiveCycle ES2 のデータベースを初期化する
- LiveCycle ES2 Business Activity Monitoring ES2 の Business Activity Monitoring ES2 メタデータを初期化する (Business Activity Monitoring ES2 がインストールされている場合)
- LiveCycle ES2 モジュールをデプロイする
- LiveCycle ES2 モジュールのデプロイメントを検証する
- LiveCycle ES (8.x) の必須データを LiveCycle ES2 システムに移行する

- LiveCycle ES2 Reader Extensions ES2、PDF Generator ES2、Connectors for ECM モジュールを設定する（設定が選択されている場合）
- (オプション) LiveCycle ES2 サンプルを読み込む

1.4 インストール、設定およびデプロイチェックリスト

ここでは、インストール、設定、およびアップグレードプロセスを進めていく際に使用できるチェックリストを用意しました。

注意： LiveCycle ES2 EAR ファイルをアプリケーションサーバーに手動でデプロイすることができます。手順についてはこのドキュメントの手動デプロイの節で説明しています。

次の表に、LiveCycle ES2 ソリューションコンポーネントをアップグレードするのに必要な手順を示します。WebLogic をインストールおよび設定してから、インストールを実行する必要があります。

タスク	トピック
LiveCycle ES に関連付けられたファイル、ディレクトリおよびデータベースを完全にバックアップします。	「LiveCycle ES2 の管理」
(LiveCycle PDF Generator ES2 のアップグレードのみ) Adobe Acrobat を Acrobat メディアからインストールします。	「Acrobat Professional の設定」 (42 ページ)
必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールおよび設定されていることを確認します。この作業には、LiveCycle ES2 のデプロイメントに必要な新しいアプリケーションサーバーおよびデータベースのインストールが含まれます。	LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備
インストールプログラムを実行して、システムに LiveCycle ES2 をインストールします。	「LiveCycle ES2 モジュールのインストール」 (13 ページ)
LiveCycle Configuration Manager を実行して、アップグレードオプションを選択します。また、アップグレードまたは今回初めて設定する、LiveCycle ES2 モジュールも選択します。	「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 (19 ページ)
タスク選択画面ですべてのタスクを選択します。これにより、LiveCycle ES2 EAR ファイルの設定とアセンブリ、アプリケーションサーバーの設定、EAR ファイルおよびその他のコンポーネントのアプリケーションサーバーへのデプロイ、LiveCycle ES2 データベースの初期化およびデプロイメントの検証が行われます。これには、様々なアップグレード固有のタスクが含まれます。	「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 (19 ページ)
LiveCycle 管理コンソールおよび User Management にアクセスします。	「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」 (36 ページ)
LDAP アクセスを設定します。	「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」 (50 ページ)

2

LiveCycle ES2 モジュールのインストール

ここでは、Windows、Linux および Solaris 上で LiveCycle ES2 インストールプログラムを実行している LiveCycle ES2 システムを設定する最初のフェーズについて説明します。後続のフェーズでは、LiveCycle Configuration Manager を実行して、LiveCycle ES2 の設定、アップグレードおよびデプロイを行います。

モジュールをインストールする前に、LiveCycle ES2 の実行に必要なソフトウェアとハードウェアが使用環境に含まれていることを確認してください。また、各インストールオプションについて理解し、必要に応じて環境を整えておく必要があります（『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』を参照）。

LiveCycle ES2 のインストールおよび設定を実行する前に、既存の LiveCycle ES (8.x) データベースをバックアップする必要があります。新しいデータベースに移行する場合は、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』ガイドの説明に従ってデータベースを準備してから、データベースのバックアップまたは移行ユーティリティを使用して、LiveCycle ES (8.x) のデータを新しいデータベースに移行してください。新しいオペレーティングシステムやアプリケーションサーバーに移行する場合は、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』ガイドで設定情報を確認してください。

この章には、以下のトピックが含まれています。

- [「インストーラの確認」](#) (13 ページ)
- [「製品ファイルのインストール」](#) (14 ページ)
- [「LiveCycle Configuration Manager を実行してアップグレードするための準備」](#) (17 ページ)
- [「アップグレードのための Connectors for ECM の準備」](#) (17 ページ)
- [「エラーログの表示」](#) (18 ページ)

2.1 インストーラの確認

インストールプロセスを開始する前に、インストーラファイルについて、次のベストプラクティスを確認してください。

▶ DVD インストールメディアの確認：

入手したインストールメディアが破損していないことを確認します。LiveCycle ES2 をインストールするコンピュータのハードディスクにインストーラのメディアコンテンツをコピーする場合は、必ず、すべての DVD コンテンツをハードディスクにコピーしてください。インストールエラーを避けるには、Windows のパスの最大長を超えるディレクトリパスに DVD インストールイメージをコピーしないでください。また、ローカルパスに番号記号 (#) などの特殊文字を使用しないでください。ローカルパスに番号記号を使用した場合、適切なライセンス情報がインストール中に表示されないことがあります。

▶ ダウンロードしたファイルの確認：

アドビの Web サイトからインストーラをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムを使用してインストーラファイルの整合性を検証してください。次のいずれかを実行し、ダウンロードファイルの MD5 チェックサムを計算して、アドビのダウンロード用 Web ページで公開されているチェックサムと比較します。

- Linux : md5sum コマンドを実行する。
- Solaris : Solaris で digest コマンドを実行する。
- Windows : WinMD5 などのツールを使用する。

▶ ダウンロードしたアーカイブファイルの展開：

アドビの Web サイトから ESD をダウンロードしたら、アーカイブファイルである [appserver]_DVD.zip (Windows) または [appserver]_DVD_unix.tar.gz (Linux または Solaris) 全体を、コンピュータに展開します。Solaris の場合は、gunzip を使用して .gz ファイルを展開します。

注意：元の ESD ファイルのディレクトリ階層は変更しないようにしてください。

2.2 製品ファイルのインストール

正常にインストールするには、インストールディレクトリに対する読み取りと書き込み権限が必要です。デフォルトのインストールディレクトリは以下のとおりですが、必要に応じて、別のディレクトリを指定することもできます。

- (Windows) C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2\
- (Linux または Solaris) /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2/

LiveCycle ES2 のインストールパスに国際化文字が含まれ、システムに UTF-8 ロケールが設定されていない場合、LiveCycle ES2 では、国際化文字を使用した [LiveCycleES2 root] 内のフォントインストールディレクトリを認識しません。このような問題を回避するには、UTF-8 ロケールセットを使用して新しいフォントディレクトリを作成してから、LiveCycle Configuration Manager を UTF-8 ロケールで実行します。このとき、ConfigurationManager.bat または ConfigurationManager.sh スクリプトに `-Dfile.encoding=utf8` 引数を追加します。

警告：LiveCycle ES2 をインストールするときに、インストールパスに 2 バイト文字または拡張ラテン文字 (€ など) を使用しないでください。

Linux でのインストールでは、インストールプログラムにより、ログインしているユーザーのホームディレクトリがファイルを格納するための一時ディレクトリとして使用されます。そのため、次のようなメッセージがコンソールに表示される場合があります。

```
WARNING: could not delete temporary file /home/<username>/ismp001/1556006
```

インストールが完了したら、一時ファイルを手動で削除する必要があります。

警告：オペレーティングシステムの一時的ディレクトリが、『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』に記載されている最小要件を満たしていることを確認してください。一時ディレクトリは次のいずれかの場所にあります。

- (Windows) 環境変数で設定されている TMP または TEMP パス
 - (Linux または Solaris) ログインユーザーのホームディレクトリ
- UNIX 系のシステムでは、root 以外のユーザーは次のディレクトリを一時的ディレクトリとして使用できます。
- (Solaris) /var/tmp

モジュールを UNIX 系のインストールする際に、デフォルトのインストール先である /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2 に正常にインストールするには、ルートユーザーでログインする必要があります。ルートユーザー以外でログインした場合は、権限 (読み取り、書き込み、実行権限) を持っている別のディレクトリにインストール先を変更してください。例えば、ディレクトリを /home/[username]/adobe_lifecycle_es2 に変更します。

Windows では、LiveCycle ES2 のインストールには管理者権限が必要です。

一時ファイルは、システムのデフォルトの一時ディレクトリまたは指定したディレクトリに生成されます。生成された一時ファイルが、インストーラの終了後も残る場合があります。これらのファイルは手動で削除することができます。

Windows の場合は、インストール中にオンアクセスウイルススキャンソフトウェアを無効にすることにより、インストールに要する時間が短縮されます。

2.2.1 Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール

Linux または UNIX プラットフォームにデプロイするために、LiveCycle ES2 を Windows にインストールして設定することができます。この機能を使用して、ロックダウンされた Linux または UNIX 環境にインストールできます。例えば、ロックダウンされた環境にはグラフィカルユーザーインターフェイスはインストールされていません。

Windows でインストールプログラムを実行するときに、LiveCycle ES2 をデプロイするターゲットプラットフォームとして Linux または UNIX オペレーティングシステムを選択することができます。インストールプログラムにより、Linux または Solaris のバイナリがインストールされます。このバイナリは、製品を設定する際にも LiveCycle Configuration Manager で使用されます。

その後、Windows を実行するコンピュータを、デプロイ可能なオブジェクトのステージング場所として使用できません。これらのオブジェクトは、アプリケーションサーバーへのデプロイメント用に Linux または UNIX コンピュータにコピーできます。対象とするアプリケーションサーバーは、オペレーティングシステムに関係なく、インストールおよび設定時に選択したものと同一である必要があります。

2.2.2 JAVA_HOME 環境変数の設定

JAVA_HOME 環境変数は、ご使用のアプリケーションサーバーの Java SDK を指している必要があります。『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』の「サポートされているソフトウェア」の表を参照してください。

2.2.3 LiveCycle ES2 のインストール

ここでは、LiveCycle ES2 製品ファイルの初期インストールについて説明します。設定およびデプロイメントについて詳しくは、[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(19 ページ\)](#) を参照してください。

注意： デプロイメントの際に権限の問題を回避するため、アプリケーションサーバーを実行する場合と同じユーザーで、LiveCycle ES2 インストーラおよび LiveCycle Configuration Manager を実行してください。

▶ LiveCycle ES2 のインストール：

1. インストールプログラムを起動します。
 - (Windows) 次のいずれかを実行します。
 - インストールメディアの `livecycle_server` ディレクトリまたはハードディスク上のコピー先フォルダに移動して、`run_windows_installer.bat` ファイルを起動します。バッチファイルによって、Windows のバージョンに適したインストーラ (32 ビット版または 64 ビット版) が起動されます。
 - インストールメディアまたはハードディスク上にあるインストーラのコピー先フォルダ内で、適切なディレクトリに移動して、`install.exe` ファイルをダブルクリックします。
 - (Windows 32 ビット版) %livecycle_server%9.0%Disk1%InstData%Windows%VM
 - (Windows 64 ビット版) %livecycle_server%9.0%Disk1%InstData%Windows_64bit%VM

- (Linux、Solaris) 適切なディレクトリに移動して、コマンドプロンプトで `./install.bin` と入力します。
 - (Linux) `/livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Linux/NoVM`
 - (Solaris) `/livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Solaris/NoVM`
- 注意：** UNIX または Linux にインストールするが、リリース DVD からは直接インストールしない場合は、インストールファイルに実行権限を設定します。
2. プロンプトが表示されたら、インストールプログラムで使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
 3. はじめに画面で「次へ」をクリックします。
 4. インストーラを実行するコンピュータに、LiveCycle ES (8.x) の以前のバージョンがインストールされている場合は、アップグレードの準備画面が表示されます。LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備をしたり、LiveCycle ES2 の新規インストールを実行したりできます。次のいずれかのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - **既存のインストールを LiveCycle ES2 v9.0 にアップグレードする準備：** インストールプログラムでは、既存の LiveCycle ES (8.x) インストールに基づいて、LiveCycle ES2 へのアップグレードで必要となるデータを準備します。このオプションを選択した場合、インストール後に、LiveCycle 管理コンソールでモジュールライセンスを更新してください。新しいオペレーティングシステムを備えていない同じコンピュータ上でインプレースアップグレードまたはアウトオブプレースアップグレードを行う場合に、このオプションを選択します。
 - **LiveCycle ES2 v9.0 をインストール：** インストールプログラムは、LiveCycle ES2 をインストールします。新しいコンピュータでアウトオブプレースアップグレードを実行する場合に、このオプションを選択します。このオプションでは、アップグレードの設定を行う場合に必要となるすべての LiveCycle ES2 ファイルがインストールされます。
 5. インストールフォルダを選択画面で、表示されたデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「選択」をクリックして LiveCycle ES2 のインストール先ディレクトリを選択してから、「次へ」をクリックします。
存在しないディレクトリの名前を入力すると、そのディレクトリが作成されます。
- 警告：** Linux または UNIX にインストールする場合は、指定するディレクトリ名にスペースを含めないでください。スペースを含めると、モジュールがインストールされません。
6. LiveCycle ES2 サーバーの使用許諾契約書を読み、「同意します」を選択して使用許諾契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。使用許諾契約書に同意しない場合は、操作を継続することはできません。
 7. プリインストールの概要画面で、詳細を確認して「インストール」をクリックします。インストールプログラムによりインストールの進行状況が表示されます。
 8. リリースノートの情報を確認して「次へ」をクリックします。
 9. インストール完了画面で詳細を確認します。
 10. 「LiveCycle Configuration Manager を起動」チェックボックスはデフォルトで選択されています。「完了」をクリックして LiveCycle Configuration Manager を実行します。Connectors for ECM をアップグレードする場合は、「LiveCycle Configuration Manager を起動します」の選択を解除して「完了」をクリックし、[「アップグレードのための Connectors for ECM の準備」 \(17 ページ\)](#) に進みます。
- 注意：** LiveCycle Configuration Manager を後で実行するには、「完了」をクリックする前に、「LiveCycle Configuration Manager を起動します」オプションの選択を解除します。[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin ディレクトリにある該当するスクリプトを使用して、LiveCycle Configuration Manager を後で起動することができます。[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(19 ページ\)](#) を参照してください。

2.3 LiveCycle Configuration Manager を実行してアップグレードするための準備

LiveCycle Configuration Manager を実行する前に、既存の LiveCycle ES (8.x) 環境のグローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリを確認します。設定時に、このディレクトリへの完全修飾パスを入力する必要があります。既存の LiveCycle 環境におけるディレクトリの正確な場所は、LiveCycle 管理コンソールの設定/コアシステム/コア設定で確認できます。バージョン 8.0 からアップグレードするとき、デフォルトの場所が使用されていると、この値は空白になります。

2.4 アップグレードのための Connectors for ECM の準備

ECM のコネクタを LiveCycle ES (8.x) から LiveCycle ES2 にアップグレードするには、LiveCycle ES2 をインストールした後、LiveCycle Configuration Manager を起動してアップグレードプロセスを完了する前に、アプリケーションサーバーシステムを設定します。

LiveCycle ES2 のアップグレードを実行するには、2つの方法があります。

インプレース：LiveCycle ES (8.x) をホストしている既存のアプリケーションサーバー上で実行。

アウトオブプレース：既存のアプリケーションサーバーの新しいバージョンで実行、または物理的に別のコンピュータでの実行。

▶ LiveCycle ES バージョン 8.0 からのインプレースアップグレード用の Connectors for ECM の構成：

注意： この修正は、LiveCycle ES バージョン 8.2 からアップグレードする場合には必要ありません。

1. [appserverdomain] ディレクトリに移動し、adobe-component-ext.properties ファイルをテキストエディタで開きます。
2. システムプロパティ `[component id]_[component version].ext=[JAR files and/or folders]` をコピーしてファイル内に貼り付けるか、または新しいシステムプロパティとして追加します。
3. 新しいシステムプロパティから `[component version]` を削除し、`[component id].ext=[JAR files and/or folders]` として行が表示されるようにします。
4. 新しい行が改行で終わっていることを確認し、ファイルを保存します。
5. アプリケーションサーバーを再起動します。

▶ アウトオブプレースアップグレード用の Connectors for ECM の構成：

このタスクは、新しいコンピュータまたは新しいアプリケーションサーバーに移行する場合のアウトオブプレースアップグレードで必要です。

注意： 新しいコンピュータでアップグレードを実行しない場合は、手順 2 に進みます。

1. (新しいコンピュータへのアウトオブプレースアップグレードのみ) 新しいアプリケーションサーバーをホストする LiveCycle ES2 サーバーに ECM リポジトリのクライアントをインストールします。
2. アップグレードを開始する前に、新しいアプリケーションサーバー上の Connectors for ECM に関連するすべての設定 (LiveCycle 管理コンソールの設定を除く) を行います。使用している設定に応じて、[「Connector for EMC Documentum サービスの設定」 \(53 ページ\)](#)、[「Connector for IBM FileNet サービスの設定」 \(57 ページ\)](#) または [「Connector for IBM Content Manager の設定」 \(67 ページ\)](#) を参照してください。
3. LiveCycle ES (8.x) サーバーの [appserverdomain] ディレクトリに移動し、ターゲットサーバーの適切なディレクトリに adobe-component-ext.properties ファイルをコピーします。

4. (バージョン 8.0 からのアップグレードのみ) adobe-component-ext.properties ファイルをテキストエディタで開きます。
5. (バージョン 8.0 からのアップグレードのみ) システムプロパティ [component id]_[component version].ext=[JAR files and/or folders] をコピーしてファイル内に貼り付けるか、または新しいシステムプロパティとして追加します。
6. (バージョン 8.0 からのアップグレードのみ) 新しいシステムプロパティから [component version] を削除し、[component id].ext=[JAR files and/or folders] として行が表示されるようにします。
7. 新しい行が改行で終わっていることを確認し、ファイルを保存します。
8. アプリケーションサーバーを再起動します。

LiveCycle Configuration Manager の実行を続行して、LiveCycle ES2 にアップグレードできるようになりました ([「次の手順」\(18 ページ\)](#) を参照)。

警告： LiveCycle ES Connector for EMC Documentum または Connector for IBM FileNet の場合、デフォルトのリポジトリを LiveCycle ES ネイティブリポジトリプロバイダに設定する必要があります。このように設定しないと、アップグレードのデプロイメントが失敗します。これらのコネクタのいずれかに対して、ECM リポジトリプロバイダをデフォルトのリポジトリとして設定した場合、LiveCycle ES (8.x) の LiveCycle 管理コンソールを開き、サービス / LiveCycle ES [connector type] / 設定に移動します。「LiveCycle ES リポジトリプロバイダ」オプションを選択して、「保存」をクリックします。

2.5 エラーログの表示

インストール中にエラーが発生した場合は、Adobe_LiveCycle_ES2_InstallLog.log ファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。このログファイルは、[LiveCycleES2_root]/log ディレクトリに作成されます。

2.6 次の手順

9.5 の新機能

デプロイする LiveCycle ES2 を設定する必要があります ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(19 ページ\)](#) を参照)。LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする予定がある場合は、LiveCycle ES2 を後から設定することもできます。その場合は、まず LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降を適用してから LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする必要があります。

Solution Accelerator のインストールについて詳しくは、『[LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールおよびデプロイ](#)』を参照してください。

3

LiveCycle ES2 をデプロイするための設定

この章では、次のタスクを実行する方法について説明します。

- アプリケーションサーバーにデプロイするため、EAR ファイルに LiveCycle ES2 モジュールを設定する
- LiveCycle ES2 をサポートするようにアプリケーションサーバーのプロパティを設定する
- アプリケーションサーバーの設定を検証する
- JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR ファイルにパッケージする（データソースをセキュリティで保護）
- LiveCycle ES2 EAR ファイルをデプロイする
- LiveCycle ES2 のデータベースを初期化する
- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする
- LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証する
- (オプション) LiveCycle ES2 の Connectors for ECM、Reader Extensions ES2、PDF Generator ES2 および PDF Generator 3D ES2 モジュールを設定する
- (オプション) LiveCycle ES2 のサンプルを LiveCycle ES2 に読み込む

「LiveCycle ES からのアップグレード」タスクを選択したときには、次のアップグレードタスクも実行されます。

- LiveCycle ES EAR ファイルおよびコンポーネントを LiveCycle ES2 にアップグレードする
- (オプション) 互換レイヤーを LiveCycle 7.x のプロセス、データおよび API で使用できるようにインストールする
- LiveCycle ES2 の運用に不可欠なデータを移行する

3.1 LiveCycle Configuration Manager の概要

LiveCycle Configuration Manager は、LiveCycle ES2 コンポーネントをアプリケーションサーバーにデプロイするために必要な設定、デプロイおよび検証を行うためのウィザード型のツールです。必要に応じて、LiveCycle Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーを設定し、製品の EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイできます。

LiveCycle Configuration Manager は、LiveCycle ES2 のインストールプログラムの実行時に、モジュールのファイルと共にインストールされます。LiveCycle Configuration Manager の実行時には、設定する LiveCycle ES2 モジュールおよび LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを指定します。

LiveCycle Configuration Manager は、インストールプログラムから実行するか、インストール後にいつでも実行することができます。アプリケーションサーバーの設定またはアプリケーションサーバーへのデプロイを行うために LiveCycle Configuration Manager を使用する場合は、そのアプリケーションサーバーを起動しておく必要があります。

別のコンピュータにインストールされているアプリケーションサーバーも設定できます。ただし、その場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを LiveCycle Configuration Manager で使用できるようにするために、LiveCycle Configuration Manager を実行しているコンピュータにもアプリケーションサーバーをインストールする必要があります（そのアプリケーションサーバーを実行する必要はありません）。

3.2 スケジュール済み呼び出しのアップグレード

LiveCycle ES2 では、LiveCycle ES2 環境での通信を有効にする場合に、Java Messaging Service (JMS) は使用されなくなりました。このため、すべてのプロセスが完了してから (または手動でそれらのプログラムを停止して)、LiveCycle Configuration Manager を実行する必要があります。LiveCycle ES2 の設定とテストを行った後で、LiveCycle ES (8.x) 環境から JMS の設定を削除します ([「Java Messaging Service の削除」\(37 ページ\)](#) を参照)。

3.3 LiveCycle Connectors for ECM のアップグレード

既存のフォームテンプレートは移行する必要があります。LiveCycle ES (8.x) リポジトリではなく、ECM リポジトリにフォームテンプレートを格納している場合は特にその必要があります。ご使用の LiveCycle ES (8.x) 環境に、Connector for EMC Documentum または Connector for IBM FileNet が実装されている場合は、設定中に LiveCycle Configuration Manager から既存のフォームテンプレートの場所を入力するように指示されます。既存のすべての LiveCycle ES (8.x) フォームテンプレートを移行するか、移行する任意のカスタムフォームテンプレートを指定することができます。

注意： LiveCycle ES2 の初期設定を行うときにフォームテンプレートを移行する必要はありません。LiveCycle Configuration Manager を再度実行して、必要なタスクを後で行うことができます。お使いの ECM バージョンが LiveCycle のバージョンでサポートされていない場合は、Configuration Manager の実行中にフォームテンプレートの移行手順をスキップしてください。ECM サーバーをアップグレードした後で、Configuration Manager を実行してこの手順を実行してください。

通常、フォームテンプレートには、関連するフォームデータオブジェクトが用意されています。フォームテンプレートを (XDP ファイルとして) ECM に格納し、ECM からフォームテンプレートをレンダリングしている場合、フォームに入力されたデータは ECM リポジトリに返されます。この場合、ユーザーがフォームデータ (xml) をクリックすると、フォームテンプレートには、事前に入力されたユーザーデータがレンダリングされて表示されます。

移行プロセス中に、既存のフォームテンプレートやその他のデータは ECM リポジトリから削除されません。ただし、これらのテンプレートのコピーが、LiveCycle ES2 ネイティブリポジトリに作成されます。フォームテンプレートが LiveCycle ES2 ネイティブリポジトリに移行されると、そのテンプレートへの参照が ECM リポジトリ内に作成されます。この参照は、両方のリポジトリに存在するフォームテンプレート間の弱いリンクとして機能します。

既存の ECM フォームテンプレートを LiveCycle ES (8.x) のインストールから移行する場合、LiveCycle Configuration Manager では、これらのテンプレートを新しい設定に移行できます。また、カスタムフォームテンプレートを移行することもできます。カスタムフォームテンプレートとは、LiveCycle ES (8.x) のインストール後に作成し、LiveCycle ES のデフォルトのテンプレート名が指定されていないテンプレートのことです。例えば、LiveCycle リポジトリを使用するのではなく ECM リポジトリを使用してフォームテンプレートを格納している場合は、移行が必要です。ECM リポジトリに格納されているフォームテンプレートのみを移行でき、LiveCycle ES (8.x) ネイティブリポジトリのフォームテンプレートは移行できません。詳しくは、LiveCycle Configuration Manager の ECM フォームテンプレートの移行画面で F1 キーを押してください。

3.4 サーバークラスタでの Content Services ES2 へのアップグレード

クラスタ上で LiveCycle ES バージョン 8.2 から Content Services ES2 へアップグレードする場合、Content Services ES2 EAR ファイルは最初のノードにデプロイされますが、他のクラスタノードにはデプロイされません。この問題は次の 2 つの対処方法によって解決されますが、各対処方法には欠点があります。それぞれの欠点を確認し、どちらの対処方法が環境に最適かを判断してください。

- アップグレードの際、LiveCycle Configuration Manager を使用して Content Services ES2 EAR ファイルを設定するときに、LiveCycle ES2 のインデックスルートディレクトリが、バージョン 8.2 で指定されていた場所とは異なる場所を指すように設定します。この対処方法によって、クラスタ内のすべてのノードを LiveCycle Configuration Manager から直接起動できるようになります。

注意：この方法を使用すると、Content Services ES2 リポジトリに多数のコンテンツが保存されている場合は、LiveCycle ES2 サーバーの起動に時間がかかります。これは、クラスタ内の各ノードがインデックスを再作成しようとするためです。

- EAR ファイルをデプロイするときに、クラスタ内の 1 つのノードだけが起動されるようにして、アップグレードプロセス全体を通して、そのノードにのみ関連する詳細情報を指定します。この方法では、LiveCycle ES2 サーバーはインデックスのアップグレードのみを実行し、インデックスを再作成しません。さらに、LiveCycle ES2 のインデックスルートディレクトリが、バージョン 8.2 で指定されていた場所を指していることを確認します。ノードが正常に起動したら、そのノードからクラスタ内の他のノード (LiveCycle Configuration Manager の実行を予定していないノード) へインデックスディレクトリをコピーします。その後で、クラスタ内の他のノードを起動します。これで、Content Services ES2 EAR ファイルが、すべてのクラスタノードに適切にデプロイされます。

注意：この対処方法は実装に時間がかかりますが、起動時のサーバーのダウン時間が最小限に抑えられます。

3.5 LiveCycle ES2 の設定、デプロイおよび LiveCycle ES2 へのアップグレード

LiveCycle ES2 のインストールを完了したら、LiveCycle Configuration Manager を実行して LiveCycle ES2 にアップグレードすることができます。LiveCycle Configuration Manager でアップグレードに必要なタスクを実行します。

LiveCycle Configuration Manager の実行時には、自動的に実行するタスクを選択することができます。

警告：デュアルスタックマシン (IPv6 と IPv4 のサポート) 上で LiveCycle ES2 Configuration Manager を実行する前に、管理サーバー、ノードマネージャおよび管理対象サーバーのリスンアドレスの割り当てが完了していることを確認します。この操作を行っていない場合は、リスンアドレスを割り当てた後、それぞれを再起動します。

注意：LiveCycle Configuration Manager によるリモートサーバーへの LiveCycle ES2 モジュールのデプロイは、ノードで管理されるアプリケーションサーバーでのみサポートされ、スタンドアロンのアプリケーションサーバーではサポートされません。

ヒント：LiveCycle Configuration Manager では、各画面で「次へ」をクリックしたときに、その画面で指定した値が検証されます。検証できない値があると、警告メッセージが表示され、画面上のプロパティは赤色で表示されて、有効な値を入力するまで次の操作に進めなくなります。

ヒント：前回の実行後、LiveCycle Configuration Manager をもう一度実行している場合、既に設定されているパラメータが表示されますが、編集はできません。これらのフィールドを編集可能にして、変更を行うには「設定を編集」をクリックします。

LiveCycle Configuration Manager によって LiveCycle ES2 EAR ファイルが設定された後、次のファイルが [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。

- adobe-livecycle-native-weblogic-[OS].ear
- adobe-livecycle-weblogic.ear
- adobe-workspace-client.ear (if you installed LiveCycle Process Management ES2)
- adobe-contentservices.ear (LiveCycle Content Services ES2 をインストールしている場合)

LiveCycle Configuration Manager を使用して EAR ファイルをデプロイする場合、LiveCycle Configuration Manager が EAR ファイルにアクセスしてアプリケーションサーバーに自動的にデプロイします。LiveCycle ES2 EAR ファイルを手動でデプロイする場合は、このディレクトリ内のファイルにアクセスしてアプリケーションサーバーにデプロイすることができます。

LiveCycle Configuration Manager で LiveCycle ES2 EAR ファイルを設定した後で、EAR ファイルの名前をカスタムファイル名に変更できます (例えば、バージョン ID や、ローカル JDK 環境の標準的な操作で必要な情報をファイル名に指定できます)。

LiveCycle Configuration Manager では、カスタムファイル名を持つ EAR ファイルのデプロイまたはデプロイ解除をサポートしていません。EAR ファイルがカスタムファイル名を使用している場合は、アプリケーションサーバーに手動でデプロイまたはデプロイ解除する必要があります (例えば、最初にカスタム名を持つ EAR ファイルをデプロイして、後からサービスパックやパッチなどの変更を適用する場合)。

ヒント: アップグレードされた LiveCycle ES2 環境で同じアプリケーションサーバーインスタンスを使用している場合、最初にアプリケーションサーバーから LiveCycle ES (8.x) EAR ファイルのデプロイを手動で解除する必要があります。このプロセス中にエラーが発生した場合、LiveCycle ES2 EAR ファイルのデプロイを手動で解除できます ([「EAR ファイルのアンインストール」 \(33 ページ\)](#) を参照)。

リモートアプリケーションサーバーを設定する場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを LiveCycle Configuration Manager で使用できるようにするために、LiveCycle Configuration Manager のコンピュータにもアプリケーションサーバーがインストールされていることを確認してください。

ヒント: LiveCycle Configuration Manager 画面でディレクトリやファイルの名前を選択したり、参照したりしているときに、フォントを上書きできます。次の JVM 引数を ConfigurationManager.bat (Windows) または ConfigurationManager.sh (Linux、UNIX) に追加してください。

```
-Dlcm.font.override=<FONT_FAMILY _NAME>
```

例えば、-Dlcm.font.override=SansSerif のように指定します。

▶ LiveCycle Configuration Manager を使用した設定 :

ヒント: LiveCycle Configuration Manager で F1 キーを押すと、表示されている画面のヘルプ情報が表示されます。このヘルプには、このドキュメントに含まれていない詳細な情報や、LiveCycle Configuration Manager の各画面に固有の情報が表示されます。

ヒント: 前回の実行後、LiveCycle Configuration Manager をもう一度実行している場合、既に設定されているパラメータが表示されますが、編集はできません。これらのフィールドを編集可能にして、変更を行うには「設定を編集」をクリックします。

1. LiveCycle Configuration Manager がインストールプログラムで自動的に起動しない場合は、[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin ディレクトリに移動し、適切なコマンドを入力して起動します。
 - (Windows) ConfigurationManager.bat
 - (Windows 以外) /ConfigurationManager.sh
2. 言語を選択するよう求められた場合は、選択して「OK」をクリックします。
3. 既存の設定データを使用するよう求められた場合は、「OK」をクリックします。
4. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
5. 「LiveCycle ES 8.0.x からのアップグレード」または「LiveCycle ES 8.2.1.x からのアップグレード」のいずれかを選択します。
6. (オプション) LiveCycle 7.x を使用して開発されたクライアントアプリケーションを実行または開発する可能性のある開発システムに LiveCycle ES2 をインストールする場合は、「LiveCycle 7.x 互換レイヤーをインストール」を選択します。

注意: LiveCycle 7.x から LiveCycle ES (8.x) システムにアップグレードした場合は、このオプションを選択する必要があります。

7. 「次へ」をクリックして続行します。

8. モジュールの選択画面で、LiveCycle ES2 モジュールを選択し、「次へ」をクリックします。

注意：現在の LiveCycle ES (8.x) システム上にあるモジュールと同数またはそれ以上の数のモジュールをインストールし、デプロイする必要があります。現在のモジュールよりも少ない数のモジュールのインストールやデプロイは行わないでください。

警告：LiveCycle ES (8.x) の一部として Business Activity Monitoring 8.x がインストールされている場合でも、Adobe Business Activity Monitoring ES2 は選択しないでください。

9. LiveCycle 7.x 互換画面 (「LiveCycle 7.x 互換レイヤーをインストール」を選択した場合にのみ表示) で、互換レイヤーを統合しない LiveCycle 7.x 製品の選択を解除します。

注意：アップグレード前の LiveCycle 7.x 環境に存在した製品のみを選択します。追加の製品を選択すると、LiveCycle 7.x データの抽出時に無害な例外が発生します。

10. タスク選択画面で、実行するすべてのタスクを選択し、「次へ」をクリックします。

注意：アップグレードするときに、「LiveCycle ES2 データベースを初期化」オプションを選択する必要があります。

注意：データソースを保護するには、「JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR にパッケージ (データソースをセキュリティで保護)」を選択します。ただし、XML フォームを処理するために LiveCycle ES2 の実装が必要な場合は、このタスクを選択しないでください。または、[この](#) Technote の手順を実行して、WebLogic アプリケーションサーバー上の JNDI アーティファクトへのアクセスを保護します。

すべてのタスクを連続して実行します。アップグレードに関する問題を回避するために、タスクをスキップしないでください。

11. インプレースアップグレードとアウトオブプレースアップグレード画面で情報を確認し、適切なすべての必要条件が実行されていることを確認して、「次へ」をクリックします。『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』を参照してください。

12. アップグレード前のステップ画面またはアップグレード前のステップ (続き) 画面で要件を確認し、ご使用の環境に関連するすべてのタスクを実行して、「次へ」をクリックします。

13. (同じコンピュータ上でのアウトオブプレースアップグレードのみ) 以前の LiveCycle をシャットダウン画面で、既存の LiveCycle ES アプリケーションサーバーを停止して、「次へ」をクリックします。

14. (7.x 互換レイヤーのインストールのみ) LiveCycle ES ファイルを読み込み画面で、LiveCycle ES (8.x) に関連付けられているデプロイ可能なアーカイブファイルへのパスを指定します。必要な情報を指定した後、「次へ」をクリックします。

15. (7.x 互換レイヤーのインストールのみ) LiveCycle 7.x コンフィグレーションデータを抽出画面で、「開始」をクリックし、抽出が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：この画面は、LiveCycle 7.x 製品に抽出可能なデータがある場合にのみ表示されます。

16. LiveCycle ES2 を設定 (1/5) 画面で、「設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

17. (7.x 互換レイヤーのインストールのみ) LiveCycle 7.x 互換を適用画面で、「開始」をクリックして LiveCycle ES2 EAR ファイルに互換レイヤーを追加し、「次へ」をクリックして次の操作に進みます。

18. LiveCycle ES2 を設定 (2/5) 画面で、「次へ」をクリックしてデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、LiveCycle ES2 がフォントへのアクセスに使用するディレクトリをカスタマイズします。その後で「次へ」をクリックします。
- (オプション)「Adobe サーバーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するかディレクトリを参照します。
 - (オプション)「カスタマフォントディレクトリ」のディレクトリを指定します。ディレクトリには、ライセンスおよびインストールされている追加のフォントが格納されています。
 - (オプション)「システムフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。
 - (オプション) FIPS を有効にするには、「FIPS を有効にする」を選択します。このオプションは、連邦情報処理規格 (FIPS) を適用する場合にのみ選択してください。
- 注意：** この画面で「システムフォントディレクトリ」や「FIPS を有効にする」の値を変更しても、アップグレードプロセスでは設定に反映されません。設定が完了した後で、LiveCycle 管理コンソールで「システムフォントディレクトリ」と「FIPS を有効にする」のオプションを手動で更新する必要があります。
[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「コア設定」を参照してください。
19. LiveCycle ES2 を設定 (3/5) 画面で、「参照」をクリックし、「一時ディレクトリの場所」を指定します。
(UNIX のみ) ルートユーザー以外がアプリケーションサーバーを実行している場合、ユーザーは指定された一時ディレクトリに対して全権限を持つ必要があります。
- 注意：** 一時ディレクトリを作成しないと、システムで設定されているデフォルトの場所が使用されます。
- 警告：** 共有ネットワークディレクトリを一時ディレクトリとして指定した場合、アップグレードが失敗することがあります。
20. LiveCycle ES2 を設定 (4/5) 画面で「参照」をクリックして、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリのパスを指定します。
- 注意：** LiveCycle ES (8.x) と同じオペレーティングシステム上でアップグレードする場合、LiveCycle Configuration Manager で既存の GDS の場所を指定できます。ディレクトリを変更する場合は、この手順が完了する前に、LiveCycle ES (8.x) GDS ディレクトリの内容を新しい場所にコピーします。
21. 永続的なドキュメントストレージを設定 (5/5) 画面で、GDS ディレクトリのほかに、永続的なドキュメントストレージのオプションを選択します。次のいずれかを選択します。
- **GDS を使用：**すべての永続的なドキュメントストレージにファイルシステムベースの GDS を使用します。このオプションでは、最高のパフォーマンスを実現し、ストレージの場所として GDS だけを使用します。
 - **データベースを使用：**永続的なドキュメントや長期間有効な成果物の保存に、LiveCycle ES2 データベースを使用します。ただし、ファイルシステムベースの GDS も必要です。データベースを使用することにより、バックアップと復元の手順が簡単になります。
22. 「設定」をクリックし、LiveCycle ES2 EAR にこのディレクトリ情報を設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。
23. (**Content Services ES2 のみ**) LiveCycle Content Services ES2 設定画面で、Content Services ES2 で使用する次のパラメータを設定して、「次へ」をクリックします。
- **コンテンツ保存場所のルートディレクトリ：**Content Services ES2 で使用するルートディレクトリを指定します。
- 注意：** インターナショナル文字を含んだコンテンツ保存場所のルートディレクトリを指定する場合は、UTF-8 ロケールを使用して LiveCycle Configuration Manager を実行します。

LiveCycle バージョン 8.2 環境の一部として Content Services ES がインストールされている場合は、現在使用しているルートディレクトリを指定するか、ここで指定した新しい LiveCycle ES2 ディレクトリにデータを手動でコピーします。

- (オプション) **CIFS を有効にする**：このオプションを選択すると、LiveCycle ES2 を実行しているサーバーのファイルに Windows ベースのクライアントからアクセスするときに Common Internet File System (CIFS) プロトコルが使用できます。「次へ」をクリックし、以下の詳細を指定します。
- **CIFS サーバー名**：Content Services ES2 リポジトリへアクセスできるようにするための名前を指定します。LiveCycle Configuration Manager のデフォルトでは、LiveCycle ES2 サーバーに「a」を付けたサーバー名が設定されます。例えば、LiveCycle ES2 サーバーの名前が `lcserver` である場合は、CIFS サーバーの名前は `lcservera` に設定されます。指定する CIFS サーバー名は、ネットワーク内で一意である必要があります。
- **CIFS サーバー実装を選択**：サーバーでサポートされている、次のいずれかの CIFS 実装の種類を選択します。

JAVA (ソケットベース)：CIFS サーバーに割り当てられている代替 IP アドレスを指定し、ローカルドメインでのサーバー名の解決方法を指定します。例えば、プライマリ IP が 10.40.68.142 である場合は、10.40.68.143 を代替 IP として割り当てます。この IP がネットワーク上の他のマシンに割り当てられていないことを確認してください。

Windows ネイティブ (DLL ベース)：「参照」をクリックして、LiveCycle Configuration Manager が DLL ファイルをコピーする先のパス (通常は `C:\Windows\system32`) を選択します。DLL ファイルのコピー元となるパスは、システムの PATH 環境変数に指定する必要があります。例えば、Windows Server 2003 および 2008 の場合、システム PATH に `C:\Windows\system32` を含める必要があります。

- **WINS サーバーまたはブロードキャストを使用してローカルドメインを解決してください**：ローカルドメインの解決に使用する方法を選択します。

ブロードキャスト：ローカルドメインにおけるネットワークセグメントのブロードキャストアドレス (サブネットマスク) を指定します。例えば、10.40.91.255 などです。ブロードキャストモードでは、CIFS サーバーとクライアントは同じサブネットに属している必要があります。

WINS サーバー：プライマリおよびセカンダリ WINS サーバーの IP アドレスを指定します。例えば、10.40.4.248 などです。WINS サーバーを選択する場合、クライアントはローカルドメイン内のどのサブネットでも使用できます。

Windows のみ

アプリケーションサーバーが Pure IPv6 モードで実行されている場合、CIFS は、Windows ではサポートされません。

CIFS サーバー名および割り当てられた仮想 IP アドレスを使用して、DNS エントリを更新し、Windows クライアントが CIFS サーバーに名前前でアクセスできるようにする必要があります。

UNIX のみ

UNIX マシンの場合、サポートされるのは Java の実装だけです。UNIX マシンでは、仮想インターフェイスを作成し、仮想 IP アドレスを割り当てる必要があります。この IP アドレスは、CIFS の実装で代替 IP アドレスとして使用することができます。これにより、UNIX マシンの場合は、Samba と CIFS を同じマシンで実行することができますが、2つの異なる IP アドレスで実行されることとなります。これらのサービスは同じポートを使用するためです。

LiveCycle ES2 の IPv6 の実装で CIFS を有効にする場合は、EAR ファイルの設定が完了した後で、`contentservices.war` ファイルを編集する必要があります。EAR ファイルを更新してから、LiveCycle Configuration Manager の次の手順へ進みます。[「IPv6 モードでの CIFS の有効化」\(66 ページ\)](#) を参照してください。

Windows Server 2003 および Windows Server 2008 では、LiveCycle Configuration Manager でのこれらの手順に加えて、他の設定手順を手動で実行する必要があります。[『LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備』](#) ガイドの「CIFS を有効にするためのサーバー設定」を参照してください。

24. (**Content Services ES2 のみ**) LiveCycle Content Services ES2 モジュール設定画面で、次のタスクを実行してから、「設定」をクリックし、Content Services ES2 の設定を使用して LiveCycle ES2 EAR ファイルを設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、Alfresco のドキュメントを参照してください。

- Content Services ES2 に実装する Alfresco Module Packages (AMP) を選択します。デフォルトでは、選択した LiveCycle ES2 モジュールに関連するすべての AMP が実装されます。
- (オプション) 独自の AMP を実装するには、「Content Services で独自の AMP をパッケージングしますか?」ボックスを選択し、「参照」をクリックして、カスタム AMP が保存されているディレクトリを選択します。選択したディレクトリ内のすべての AMP がパッケージングされます。

注意： SharePoint クライアントを Alfresco CMS に移行できるようにするには、SharePoint AMP である [LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥ContentServices¥adobe-vti-module.amp を追加する必要があります。

このファイルを追加したら、[「SharePoint クライアントアクセスの設定」\(65 ページ\)](#) で説明されている手順を実行します。

25. (**Windows のみ**) Acrobat を LiveCycle PDF Generator に合わせて設定画面で、「設定」をクリックして、Adobe Acrobat および必要な環境設定を設定するスクリプトを実行します。完了したら「次へ」をクリックします。

この画面は、サーバーコンピュータでローカルに LiveCycle Configuration Manager を実行している場合のみ表示されます。Adobe Acrobat が既にインストールされている必要があります。インストールされていないと、この手順は失敗します。

注意： Linux または Solaris で OpenOffice.org を使用するには、Openoffice_PATH 環境変数を設定します。[「環境変数の設定」\(41 ページ\)](#) を参照してください。

26. LiveCycle ES2 の概要を設定画面で、「次へ」をクリックします。設定したアーカイブは [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。

27. LiveCycle ES2 データベース画面で、LiveCycle Configuration Manager から LiveCycle ES2 データベースに接続できるように、そのデータベースについての情報を指定します。

注意： 次の情報は、LiveCycle ES2 が接続するデータベースに適用されます。このデータベースには、既存の LiveCycle ES (8.x) データベース、または設定済みで既存の LiveCycle データが移行されている新しいデータベースのいずれかを使用できます ([『LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備』](#)を参照)。

データベースの種類： LiveCycle ES2 データベースとして使用するデータベースの種類。

データベース名： 接続する LiveCycle ES2 データベースの名前。

ホスト： LiveCycle ES2 データベースサーバーをホストするコンピュータの名前または IP アドレス (解決できる場合のみ名前を使用)。

ポート： データベースサービスへのアクセスに使用するポート。表示されるポート番号は、選択したデータベースタイプのデフォルト値です。データベースにデフォルト以外のポート番号を使用する場合は、その番号をここに入力します。

ユーザー： 上記で入力したデータベース名 (LiveCycle ES2 用に作成したデータベース) で指定されたデータベースサーバーにアクセスしたユーザーアカウントの名前。

パスワード： 上記で入力したデータベース名で指定したユーザーアカウントのパスワード。

JDBC ドライバ： LiveCycle ES2 と共にインストールされ、データベースへの接続に使用される JDBC ドライバの場所。ドライバは [LiveCycle ES2 root]/lib/db ディレクトリに置かれている場合があります。ここでドライバを指定すると、LiveCycle Configuration Manager でデータベース接続をテストすることができます。ここに入力できるのは 1 ファイルのみです。LiveCycle ES2 の実行中には JDBC ドライバが使用されるので、ドライバの場所はアプリケーションサーバーのノードにある必要があります。JDBC ドライバの情報を参照するには、LiveCycle ES2 データベース画面で、**F1** キーを押します。

注意： LiveCycle Configuration Manager がサポートドライバを見つけることができない場合、このエラーは致命的ではなく、報告されることはありません。

「接続を検証」をクリックして、ここにある情報が有効であることおよび LiveCycle Configuration Manager がデータベースに接続できることを確認し、「次へ」をクリックして続行します。

注意： LiveCycle Configuration Manager を JDK 5 から起動した場合は、Oracle データベース用に ojdbc5.jar を使用します。JDK 6 から起動した場合は、Oracle データベース用に ojdbc6.jar を使用します。

28. アプリケーションサーバーの設定の詳細画面で、各フィールドの情報を指定して（すべてのフィールドは必須です）、「サーバー接続を検証」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。

注意： Adobe LiveCycle Configuration Manager のアプリケーションサーバーの設定の詳細画面では、アプリケーションサーバーのホスト名に使用する形式は、WebLogic Administration Console の「Listen Address」ボックスの値によって決まります。「Listen Address」ボックスが空の場合は、デフォルトの「localhost」をそのままホスト名として使用する必要があります。「Listen Address」ボックスに IP アドレスが表示されている場合は、ホスト名にその IP アドレスを使用する必要があります。

注意： LiveCycle Configuration Manager を使用してアプリケーションサーバーを設定し、ホスト名を IP アドレスで入力している場合、そのアプリケーションサーバーへのアクセスには常にその IP アドレスを使用する必要があります。

アプリケーションサーバーの「サーバーインスタンス名」は、大文字と小文字が区別されます。

LiveCycle Configuration Manager では、アプリケーションサーバーを実行しているサーバーの修飾されたホスト名を入力する必要があります。デフォルト値の localhost では動作しません。

29. アプリケーションサーバーの設定の選択画面で、LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。次の 1 つ以上のタスクを選択することができます。デフォルトでは両方のタスクが選択されます。

- サーバー設定を設定
- データソースを設定：次のいずれかのオプションを選択して、データソースを設定します。
 - パッケージされた JDBC モジュール（データソースをセキュリティで保護）（このオプションは、以前に「JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR にパッケージ」オプションを選択した場合にのみ使用できます）
 - グローバルスコープのデータソース

30. （「サーバー設定を設定」を選択した場合のみ）サーバー設定の設定画面で、各フィールドに情報を入力して「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。

31. （「パッケージされた JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」を選択した場合）データソース JDBC ドライバのクラスパスを設定画面で、JDBC ドライバのパスを指定します。

32. （「グローバルスコープのデータソース」を指定して「データソースを設定」を選択した場合）データソース設定画面で、各フィールドに情報を入力し、「データベース接続をテスト」をクリックします。接続のテストが正常に終了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。

33. アプリケーションサーバーの設定画面で、「設定」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

34. （「パッケージされた JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」を選択した場合）JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR にパッケージ (1/2) 画面で、JDBC 設定の詳細を入力して、「データベース接続をテスト」をクリックします。データソース設定のパラメータについて詳しくは、**F1** キーを押してください。

35. (「パッケージされた JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」を選択した場合) JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR にパッケージ (2/2) 画面で、WebLogic のデータソース設定用に暗号化されたデータベースパスワードを生成するための詳細情報を入力します。次のいずれかのオプションを使用します。

警告：これは、WebLogic アプリケーションサーバーによって暗号化されたデータベースパスワードであり、アプリケーションサーバーのパスワードではありません。

- **既存の WebLogic で暗号化されたパスワードを使用：**データベース用に暗号化されたパスワードが既にある場合は、このオプションを選択します。WebLogic の暗号化ユーティリティを使用して、データベース接続のテスト用に前の画面で入力したパスワードを暗号化することができます。
- **WebLogic で暗号化されたパスワードを生成：**データベース用に暗号化されたパスワードを生成し、必要な詳細を指定する場合は、このオプションを選択します。データベース接続のテスト用に前の画面で入力したプレーンテキストのパスワードが、「パスワード」フィールドに自動的に入力されます。「パスワードを暗号化」をクリックして、暗号化されたデータベースパスワードを生成します。

36. 「設定」をクリックして、JDBC モジュールを LiveCycle ES2 EAR にパッケージし、完了したら、「次へ」をクリックします。

37. アプリケーションサーバーの設定の検証画面で、検証するタスクを選択し、「検証」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

注意： (WebLogic のみ) JDBC モジュールが LiveCycle ES2 EAR ファイルにパッケージされていると、LiveCycle Configuration Manager によって、アプリケーションサーバーの設定の検証中にデータソースの検証に失敗したことが報告されます。このメッセージは無視できます。

38. LiveCycle ES2 IVS EAR の対象範囲の確認画面が表示される場合は、この画面で、インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルをデプロイメントセットに含めるオプションを選択します。

警告：IVS EAR ファイルを実稼働環境にデプロイすることは、お勧めしません。

39. (インプレースアップグレードのみ) アプリケーションサーバーから LiveCycle ES EAR をデプロイ解除の画面で情報を確認し、必要なタスクを実行してから「次へ」をクリックします。

40. LiveCycle ES2 EAR をデプロイ画面で、デプロイする EAR ファイル を選択してから「デプロイ」をクリックします。デプロイには数分かかる場合があります。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：この手順の後、null という名前のディレクトリが [appserverdomain] に作成されているかどうかを確認します。作成されている場合は、管理対象サーバー、ノードマネージャ、管理サーバーを停止し、逆の順序で起動します。再起動した後、**adobe** という名前のディレクトリが [appserverdomain] に作成されていることを確認します。確認できたら、[appserverdomain]/null ディレクトリを削除します。

41. LiveCycle ES2 データベースの初期化画面で、ホストとポートの情報を確認して、「初期化」をクリックします。データベースの初期化タスクによって、データベースにテーブルが作成され、デフォルトのデータがテーブルに追加されて、データベースに基本的なロールが作成されます。初期化が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

警告：この手順はスキップしないでください。スキップするとアップグレードが失敗します。このプロセスによって、既存のデータが損害を受けることはありません。

この画面のポートは、管理サーバーのポートではなく、管理対象サーバーのポートを示しています。

42. LiveCycle ES2 サーバー情報画面で、「パスワード」ボックスに LiveCycle ES (8.x) 管理者パスワードを入力します。

43. 「サーバー接続を検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：この画面に表示されるサーバー情報はデプロイメントの既定値です。

サーバー接続の検証は、デプロイメントや検証でエラーが発生した場合に、トラブルシューティングの対象を絞り込むのに役立ちます。接続テストが正常に終了しても以降の段階でデプロイメントや検証のエラーが発生する場合は、接続の問題をトラブルシューティングの対象から除外できます。

44. Central Migration Bridge Service デプロイメント設定画面が表示される場合は、この画面で「Central Migration Bridge Service をデプロイメントに含める」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。
45. LiveCycle コンポーネントのデプロイメント画面で、「デプロイ」をクリックします。ここでデプロイされるコンポーネントは、サービスのデプロイ、統合および実行を目的として LiveCycle ES2 サービスコンテナにプラグインされている Java アーカイブファイルです。検証の進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意： Task Manager モジュールは、LiveCycle ES (8.x) と LiveCycle ES2 との間で変更されているため、デプロイメント中に次のような例外メッセージが表示されます。

```
Caused by: java.lang.ClassNotFoundException: http-0.0.0.0-8080-1Class
name com.adobe.idp.taskmanager.dsc.userservice.UserServiceImpl from
package com.adobe.idp.taskmanager.dsc.userservice not found.
```

これらの例外は正常であり、無視してかまいません。

46. LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証画面で、「検証」をクリックします。LiveCycle Configuration Manager によって、LiveCycle コンポーネント (Java アーカイブファイル) が LiveCycle ES2 サーバーにデプロイされ、稼働していることが検証されます。検証の進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
47. LiveCycle サーバー JNDI 画面で、LiveCycle ES2 をデプロイするアプリケーションサーバーの JNDI ポート情報をすべて指定し、「接続を検証」をクリックします。検証が完了したら、「次へ」をクリックします。
48. **(Connectors for ECM)** ECM フォームテンプレートを移行画面で、次のいずれかのタスクを実行してから、「開始」をクリックします。

ヒント： LiveCycle Configuration Manager ヘルプを確認するには、この画面で F1 キーを押します。

- 「フォームテンプレートの読み込みをスキップ」を選択し、「次へ」をクリックして、フォームテンプレートを読み込まずに LiveCycle ES2 の設定を続行します。LiveCycle ES2 環境を設定した後で、LiveCycle Configuration Manager を再度実行して、テンプレートを読み込むことができます。
 - 「フォームテンプレートの読み込みをスキップ」の選択を解除し、「開始」をクリックして、LiveCycle Configuration Manager で ECM Connector のリポジトリにあるフォームテンプレートの情報を取得するクエリを実行します。その後、後続の画面で LiveCycle Configuration Manager によって結果が返され、読み込むテンプレートを個別に選択できます。
49. **(「フォームテンプレートの読み込みをスキップ」の選択を解除した Connectors for ECM のみ)** ECM フォームテンプレートを移行 (続き) 画面で、次のオプションのタスクを実行してから、「次へ」をクリックします。
 - LiveCycle ES フォームテンプレートを選択または選択解除し、既存の LiveCycle ES 環境から移行します。
 - 「次のフォームのパスを追加して移行」ボックスに、カスタムフォームテンプレートが格納されているディレクトリへの完全修飾パスを入力するか、「参照」をクリックしてそのディレクトリを探し、「追加」をクリックします。オブジェクトストア名またはリポジトリ名 (使用している ECM に従います) を、以下のように指定します。

(IBM FileNet) /<ObjectStoreName>/<FormTemplatePath>

(EMC Documentum) /<DocbaseName>/<FormTemplatePath>

注意： データの移行中、既存の LiveCycle ES (8.x) フォームテンプレートは ECM リポジトリから削除されませんが、LiveCycle ES2 リポジトリにコピーされます。このとき、選択解除したフォームテンプレートは後で移行できます。そのためには、LiveCycle Configuration Manager を再度実行します。

50. LiveCycle ES2 の運用に必要なデータを移行画面で、「開始」をクリックし、移行が完了したら、「次へ」をクリックします。

この手順では、設定内容、フォーム、フォームデータ、環境設定、ファイルタイプ設定、ジョブオプション、セキュリティ設定、監視フォルダおよび電子メールジョブソース (アップグレードする製品による)、カスタムフォントおよび GDS ディレクトリ内のドキュメントのコピーが行われます。LiveCycle Rights Management ES2 の場合、データベーススキーマは必要に応じて更新されます。

警告： (LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet のみ) LiveCycle ES バージョン 8.0 からアップグレードする場合、Connector for IBM FileNet Process Engine サービスを開始しようとしたときに、移行ログにプラグインの実行失敗エラーが表示されます。このサービスはバージョン 8.0 では使用できませんでした。[「デプロイメント完了後の作業」\(35 ページ\)](#) のタスクを実行すると、手動で設定できます。

51. (「LiveCycle 7.x 互換レイヤーをインストール」を選択した場合のみ) 7.x 互換 DSC をデプロイ画面で、「開始」をクリックして LiveCycle 7.x 互換レイヤーコンポーネントファイルをデプロイします。デプロイメントが完了したら、「次へ」をクリックします。
52. プロンプトが表示されたら、アプリケーションサーバーを再起動します。
53. LiveCycle コンポーネントを設定画面で、LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。

注意： いずれかの LiveCycle ES (8.x) Connectors for ECM モジュールをアップグレードする場合は、この画面でそのモジュールは選択しないでください。LiveCycle ES2 でそのモジュールを初めてライセンスする場合にのみ、モジュールを選択し、必要に応じて次の各手順を実行します。

54. (オプション - EMC Documentum のみ) EMC Documentum のクライアントを指定画面で、「Connector for EMC Documentum コンテンツサーバーを設定します。」を選択して、次の情報を指定します。詳細情報を入力して、「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
- **EMC Documentum クライアントのバージョンを選択：** EMC Documentum Content Server で使用するクライアントのバージョンを選択します。
 - **EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリのパス：**「参照」をクリックして、ディレクトリのパスを選択します。
55. (オプション - EMC Documentum のみ) EMC Documentum Content Server 設定を指定画面で、EMC Documentum Server の詳細を入力し、「次へ」をクリックします。入力する必要がある情報については、F1 キーを押してください。
56. (オプション - EMC Documentum のみ) Adobe LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum を設定画面で、「Documentum Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
57. (オプション - IBM Content Manager のみ) IBM Content Manager のクライアントを指定画面で、「IBM Content Manager のクライアントを指定」を選択し、「IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリのパス」を入力します。「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
58. (オプション - IBM Content Manager のみ) IBM Content Manager サーバーの設定を指定画面で、IBM Content Manager Server の詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
59. (オプション - IBM Content Manager のみ) Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager を設定画面で、「IBM Content Manager Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

60. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet のクライアントを指定画面で、「IBM FileNet のクライアントを指定」を選択し、次の設定を指定します。詳細情報を入力して、「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
- **IBM FileNet クライアントのバージョンを選択**：EMC Documentum Content Server で使用するクライアントのバージョンを選択します。
 - **IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリのパス**：「参照」をクリックして、ディレクトリのパスを選択します。
61. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Content Server の設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
62. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Process Engine のクライアントを指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「確認」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
63. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Process Engine サーバーの設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
64. **(オプション - IBM FileNet のみ)** Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet を設定画面で、「FileNet Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
65. **(オプション - LiveCycle ES2 Connector for Microsoft SharePoint のみ)** Adobe LiveCycle ES2 Connector for Microsoft SharePoint の画面で、次の詳細情報を入力して「設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 注意**：LiveCycle 管理コンソールを使用して後で SharePoint Connector を設定する場合は、この手順をスキップできます。
- **ユーザー名およびパスワード**：SharePoint サーバーへの接続に使用するユーザーアカウントの詳細情報を入力します。
 - **ホスト名**：SharePoint サーバーのホスト名を <hostname>:<port> の形式で入力します。SharePoint サーバー上の Web アプリケーションのポート番号を指定します。
 - **ドメイン名**：SharePoint サーバーが存在しているドメインを入力します。
66. **(PDF Generator ES2 のみ)** LiveCycle サーバーマシン管理者のユーザー資格情報を管理画面で、サーバークンピュータの管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力して、「追加」をクリックします。
- 注意**：Windows Server 2008 の場合は、管理ユーザーを 1 人以上追加する必要があります。Windows Server 2008 では、追加するユーザーのユーザーアカウント制御 (UAC) を無効にする必要があります。UAC を無効にするには、コントロールパネル/ユーザーアカウント/ユーザーアカウント制御の有効化または無効化を順にクリックし、「ユーザーアカウント制御 (UAC) を使ってコンピュータの保護に役立たせる」の選択を解除します。次に、「OK」をクリックします。変更を適用するには、コンピュータを再起動します。
- Windows Server 2003、Linux および Solaris の場合は、ユーザーの追加は必須ではありません。Linux および Solaris プラットフォームで追加されるユーザーには、sudo 権限が必要です。
- 詳しくは、この画面で F1 キーを押し、LiveCycle Configuration Manager ヘルプにアクセスしてください。
67. **(LiveCycle Configuration Manager がサーバーマシン上でローカルに実行されている場合の PDF Generator ES2 のみ)** LiveCycle PDFGenerator System Readiness Test 画面で、「開始」をクリックし、システムが PDF Generator ES2 に合わせて適切に設定されているかどうかを検証します。
68. **(PDF Generator ES2 のみ)** System Readiness Tool レポートを確認し、「次へ」をクリックします。

69. **(Reader Extensions ES2 のみ)** デフォルトの Reader Extensions 証明書画面で、デフォルトの Reader Extensions ES の証明書に対するエイリアスが正しいことを確認して、「次へ」をクリックします。

注意： LiveCycle ES (8.x) システムで秘密鍵証明書が設定されていない場合は、代わりに次の画面が表示されます。

70. **(Reader Extensions ES2 のみ)** LiveCycle Reader Extensions ES2 の秘密鍵証明書の設定画面で、モジュールサービスをアクティブにする Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書に関連する詳細を指定します。

- **秘密鍵証明書ファイル：**Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書のパスとファイル名 (.pfx または .p12 ファイルタイプ)。
- **秘密鍵証明書のパスワード：**秘密鍵証明書に関連付けられるパスワード。このパスワードは秘密鍵証明書ファイルと共に提供されています。
- **この秘密鍵証明書のユーザー定義の名前：**設定時にこの秘密鍵証明書に対して指定した名前 (またはエイリアス)。

この名前は、Reader Extensions ES2 Web インターフェイスに表示され、SDK 呼び出しを通じて秘密鍵証明書の参照に使用されるエイリアスです。Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書には任意の一意名を作成できます。

注意： ここで、「LiveCycle 管理コンソールを使用して後から設定」を選択すると、この手順をスキップできます。デプロイメントの完了後に、LiveCycle 管理コンソールで Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書を設定できます (LiveCycle 管理コンソールにログインしたら、ホーム/設定/Trust Store の管理/ローカル秘密鍵証明書の順にクリックします)。

「設定」をクリックし、「次へ」をクリックします。

71. (オプション) LiveCycle ES2 サンプルを読み込み画面で、「読み込み」をクリックします。読み込みが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。または、「LiveCycle ES2 サンプルの読み込みをスキップ」をクリックしてから「次へ」をクリックし、サンプルを後で読み込みます。

警告： LiveCycle ES2 サンプルは実稼働環境に読み込まないでください。これらのサンプルによりデフォルトパスワードを持つユーザーが作成され、実稼働環境にセキュリティ上の問題が生じる可能性があります。

72. 概要ページで、実行するタスクを確認して、「次へ」をクリックします。

73. 次の手順画面に、URL とログイン情報が表示されます。「完了」をクリックし、LiveCycle Configuration Manager を終了します。

注意： LiveCycle ES2 を設定したら、実際のソリューション実装に該当する設定後の作業を行います。

3.6 EAR ファイルの手動デプロイメント

タスク選択画面で「LiveCycle ES2 EAR をデプロイします」を選択しなかった場合は、アップグレードを完了する前に、手動で EAR をデプロイする必要があります。LiveCycle Configuration Manager を使用して、EAR ファイルを設定しておく必要があります。

デプロイメントプロセス中に、次の EAR ファイルをデプロイする必要があります。

- adobe-livecycle-native-weblogic-[OS].ear
- adobe-livecycle-weblogic.ear
- adobe-workspace-client.ear (Process Management ES2 のみ)
- adobe-contentservices.ear (Content Services ES2 のみ)

LiveCycle Configuration Manager を使用して LiveCycle ES2 を設定すると (必須)、これらのファイルは [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。アプリケーションサーバーの管理コンソールを使用してコンポーネント EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイすることで、LiveCycle ES2 コンポーネントをアプリケーションサーバーにデプロイします。

アプリケーションサーバーにデプロイする前に、使用しているコンピュータでアプリケーションサーバーを起動します。必須のコンポーネントをデプロイした後に、アプリケーションサーバーを停止して再起動してからサービスを起動します。

LiveCycle Configuration Manager を実行して、データベースの初期化と、コンポーネントおよび LiveCycle ES2 アーカイブファイル (LCA) のデプロイを行います。必要に応じて、コンポーネントおよび LCA のデプロイメントを検証することもできます。

► WebLogic への EAR ファイルのデプロイ：

1. Web ブラウザを開き、<http://localhost:7001/console> にある WebLogic Server Administration Console の Web ページに移動します。
2. この WebLogic Server 設定の作成時に使用したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
3. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
4. 「Domain Structure」で、「Deployments」をクリックし、右側のペインで「Install」をクリックします。
5. Install Application Assistant ウィンドウで、ドライブをクリックし、インストールするデプロイメント EAR ファイルに移動します。
6. EAR ファイルを選択し、「Next」をクリックします。
7. 「Install this deployment as an application」を選択し、「Next」をクリックします。
8. 表示されたリストからデプロイメント対象を選択します (この場合は、管理対象サーバー名を選択します)。
9. 「Next」をクリックして、デフォルトの設定を受け入れて、「Finish」をクリックします。
10. Change Center で、「Activate Changes」をクリックします。
11. 右側のペインで、今インストールしたアプリケーションをクリックします。
12. 「Start」をクリックし、メニューから「Servicing all requests」を選択します。
13. 右側のペインで「Yes」をクリックします。
14. Change Center で、「Activate Changes」をクリックします。
15. ここで挙げた EAR ファイルごとに、手順 6～14 を繰り返します。

3.7 EAR ファイルのアンインストール

LiveCycle ES2 モジュールのデプロイを解除するには、次の手順を実行します。

► EAR ファイルのアンインストール：

1. 管理サーバーと管理対象サーバーを起動します。
2. Web ブラウザの URL 行に <http://localhost:7001/console> と入力して WebLogic Server Administration Console を起動します。
3. 「Domain Structure」で、「Deployments」をクリックします。

4. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
5. 「LiveCycle application」ボックスを選択し、LiveCycle アプリケーション (adobe-livecycle-native-weblogic-[OS]、adobe-livecycle-weblogic、adobe-workspace-client、adobe-contentservices など) を選択します。
6. 「Deploy」タブで「Stop」をクリックします。
7. 「Lock & Edit」をクリックし、停止しているアプリケーションを選択して、「Delete」をクリックします。
8. デプロイしたその他の LiveCycle ES2 モジュールに対して、手順 5～7 を繰り返します。
9. 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
10. 管理サーバーと管理対象サーバーを停止して起動します。

3.8 次の手順

LiveCycle ES2 の設定とデプロイを完了したら、次の作業を実行できます。

- デプロイメントの確認 ([「デプロイメントの確認」\(36 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールへのアクセス ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(36 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 の設定 ([「LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定」\(40 ページ\)](#) を参照)。
- Rights Management ES2 の最終設定 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(49 ページ\)](#) を参照)。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle ES2 モジュールの設定 ([「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」\(50 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 の監視フォルダパフォーマンスの設定 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(49 ページ\)](#) を参照)。
- FIPS モードの有効化 ([「FIPS モードの有効化」\(52 ページ\)](#) を参照)。
- HTML 電子署名の設定 ([「HTML 電子署名の設定」\(53 ページ\)](#) を参照)。
- Connector for EMC Documentum、Connector for IBM Content Manager または Connector for IBM FileNet の設定 ([「Connector for EMC Documentum サービスの設定」\(53 ページ\)](#)、[「Connector for IBM FileNet サービスの設定」\(57 ページ\)](#) または [「Connector for IBM Content Manager の設定」\(67 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 の環境変数の設定 ([「環境変数の設定」\(41 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 のインストールおよびデプロイ。
- LiveCycle ES2 の互換性を確保するための LiveCycle 7.x アプリケーションの更新 ([「クライアント JAR ファイルの再パッケージ化」\(52 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle ES2 のアンインストール ([「LiveCycle ES2 のアンインストール」\(72 ページ\)](#) を参照)。

4

デプロイメント完了後の作業

この章では、LiveCycle 管理コンソールにアクセスしてアプリケーションサーバーのログファイルを確認することにより、デプロイメントの検証を行う方法について説明します。また、インストール、設定およびアプリケーションサーバーへのデプロイを完了した LiveCycle ES2 モジュールおよびサービスを使用して処理を開始する方法についても説明します。

- [「アプリケーションサーバーの再起動」 \(35 ページ\)](#)
- [「日付、時刻およびタイムゾーンの設定」 \(36 ページ\)](#)
- [「デプロイメントの確認」 \(36 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール」 \(37 ページ\)](#) (オプション)
- [「Java Messaging Service の削除」 \(37 ページ\)](#)
- [「モジュールの Web アプリケーションへのアクセス」 \(38 ページ\)](#)
- [「Workbench ES2 へのアップグレード」 \(39 ページ\)](#)
- [「User Management へのアクセス」 \(40 ページ\)](#)
- [「LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定」 \(40 ページ\)](#)
- [「Forms ES2 キャッシュのリセット」 \(50 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」 \(50 ページ\)](#)
- [「クライアント JAR ファイルの再パッケージ化」 \(52 ページ\)](#)
- [「FIPS モードの有効化」 \(52 ページ\)](#)
- [「HTML 電子署名の設定」 \(53 ページ\)](#)
- [「Document Management サービスの設定」 \(53 ページ\)](#)
- [「Connector for EMC Documentum サービスの設定」 \(53 ページ\)](#)
- [「Connector for IBM FileNet サービスの設定」 \(57 ページ\)](#)
- [「Connector for IBM Content Manager の設定」 \(67 ページ\)](#)
- [「Business Activity Monitoring ES2 のアップグレードおよびデプロイ」 \(70 ページ\)](#)
- [「システムイメージバックアップの実行」 \(72 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2 のアンインストール」 \(72 ページ\)](#)

この章の設定を行った後、LiveCycle ES2 の開発環境および実稼働環境の設定について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

4.1 アプリケーションサーバーの再起動

LiveCycle ES2 を初めてデプロイするとき、サーバーはデプロイメントモードになっています。このモードでは、ほとんどのモジュールがメモリ内に配置されます。このため、メモリの消費量が高く、サーバーは実稼働に適した状態ではありません。アプリケーションサーバーを再起動して、サーバーをクリーンな状態に戻す必要があります。

4.2 日付、時刻およびタイムゾーンの設定

LiveCycle ES2 環境に接続するすべてのサーバーで日付、時刻およびタイムゾーンを設定することで、時間に依存するモジュール (LiveCycle Digital Signatures ES2 や LiveCycle Reader Extensions ES2 など) が正常に機能するようになります。例えば、未来の時間に作成された署名は、有効になりません。

同期を必要とするサーバーは、データベースサーバー、LDAP サーバー、HTTP サーバーおよび J2EE サーバーです。

4.3 デプロイメントの確認

LiveCycle 管理コンソールにログインすることで、デプロイメントの検証を行うことができます。正常にログインできる場合は、LiveCycle ES2 がアプリケーションサーバーで実行されており、データベースにデフォルトのユーザーが作成されています。

アプリケーションサーバーのログファイルを確認して、コンポーネントが正しくデプロイされたことを確認したり、発生する可能性のあるデプロイメントの問題の原因を特定したりすることができます。

4.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス

LiveCycle 管理コンソールは、各種設定ページにアクセスするための Web ベースのポータルです。これらの設定ページでは、LiveCycle ES2 の動作を制御する実行時プロパティを設定できます。LiveCycle 管理コンソールにログインすると、User Management、監視フォルダ、電子メールクライアント設定、および他のサービスの管理設定オプションにアクセスできます。LiveCycle 管理コンソールでは、管理者がアーカイブの管理およびサービスの実稼働環境へのデプロイに使用するアプリケーションおよびサービスにもアクセスできます。

ログインする場合のデフォルトのユーザー名とパスワードは、それぞれ administrator と password です。初回のログイン後は、User Management にアクセスしてパスワードを変更してください。アップグレードした環境の場合は、ユーザー名とパスワードは、管理者が LiveCycle ES (8.x) を設定したときに指定したものと同じです。

LiveCycle 管理コンソールにアクセスするには、デプロイ済みの LiveCycle ES2 がアプリケーションサーバー上で実行されている必要があります。

LiveCycle 管理コンソールの使用について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

► LiveCycle 管理コンソールにアクセスするには

1. Web ブラウザに次の URL を入力します。

```
http://[host name]:[port]/adminui
```

WebLogic Server のデフォルトのポート番号は 7001 です (新しい管理対象サーバーを作成した場合は、異なるポートが設定されている可能性があります。管理対象サーバーはデフォルトのポートである 8001 を使用します)。

2. 「ユーザー名」と「パスワード」ボックスに LiveCycle ES2 管理ユーザーの名前とパスワードを入力します。
3. ログイン後、「サービス」をクリックして、サービスの管理ページにアクセスするか、「設定」をクリックして、様々なモジュールの設定を管理できるページにアクセスします。

4.3.2 デフォルトのパスワードの変更

LiveCycle ES2 では、インストール時に 1 つ以上のデフォルトのユーザーが作成されます。これらのユーザーのパスワードは製品資料に記載され、公開されています。セキュリティ要件に応じて、このデフォルトのパスワードを変更する必要があります。

LiveCycle ES2 管理者のユーザーパスワードは、デフォルトで「password」に設定されています。このパスワードは、LiveCycle 管理コンソール/設定/User Management で変更する必要があります。

4.3.3 ログファイルの表示

実行時や起動時のエラーなどのイベントは、アプリケーションサーバーのログファイルに記録されます。アプリケーションサーバーへのデプロイ中に何らかの問題が発生した場合には、ログファイルを参照して問題を見つけることができます。ログファイルは、テキストエディタを使用して開くことができます。

次のログファイルは、次の場所にあります：
[appserverdomain]/servers/
[managed server name]/logs ディレクトリ

- - [managed server name].log
- - [managed server name].out

4.4 LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール

9.5 の新機能

LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールを予定している場合は、最初に LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降を適用してから LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする必要があります。ただし、LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール後に LiveCycle Configuration Manager を再実行する必要があります。ことに注意してください。

Solution Accelerator のインストールについて詳しくは、『[LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールおよびデプロイ](#)』を参照してください。

4.5 Java Messaging Service の削除

LiveCycle ES (8.x) では、Java Messaging Service (JMS) を使用して、アプリケーションコンポーネント間の分散通信を実現しています。LiveCycle ES2 では、このテクノロジーは使用されなくなりました。このため、LiveCycle ES2 のデプロイメントが適切に実行されていることが確認できた場合は、アプリケーションサーバーからすべての JMS 設定を削除してください。

既存の WebLogic 10 サーバーを再利用して、インプレースアップグレードを実行した場合は、LiveCycle ES (8.x) システム用に作成した JMS 設定を削除してください。

▶ JMS 設定の削除：

1. Web ブラウザの URL 行に `http://[host name]:[port]/console` と入力して、WebLogic Server Administration Console を起動します。
2. WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
3. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
4. 「Domain Structure」で、Services/Messaging/JMS Modules をクリックします。

- 「IDPJMSModule」をクリックし、LiveCycle ES (8.x) 用に作成された、すべての jobmanager、ワークフローピックおよびキューを削除します。
- LiveCycle ES (8.x) 用に作成された、次のすべての接続ファクトリを削除します。
 - adobe_PEDCommandQueue
 - adobe_JobManagerQueue
 - adobe_TaskEventTopic
 - IDPQueueConnectionFactory
 - IDPTopicConnectionFactory
 - JobManagerQueueConnectionFactory
- IDPJMSModule を削除し、「Activate」をクリックして変更を保存します。

4.6 モジュールの Web アプリケーションへのアクセス

LiveCycle ES2 のデプロイ後には、次のモジュールに関連付けられた Web アプリケーションにアクセスできます。

- LiveCycle Reader Extensions ES2
- LiveCycle Workspace ES2
- LiveCycle Content Services ES2
- LiveCycle Rights Management ES2
- LiveCycle Business Activity Monitoring ES2

デフォルトの管理者権限を使用して Web アプリケーションにアクセスし、そのアプリケーションにアクセス可能であることを確認したら、他のユーザーがログインしてアプリケーションを使用できるように追加のユーザーとロールを作成できます ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照)。

▶ Reader Extensions ES2 Web アプリケーションにアクセスするには

注意： Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書を適用して、新しいユーザーのユーザーロールを適用する必要があります ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「秘密鍵証明書を Reader Extensions ES2 で使用するための設定」を参照)。

- ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://localhost:[port]/ReaderExtensions
```

WebLogic の場合、[port] は管理対象 WebLogic Server に割り当てられているポートです。

- LiveCycle ES2 用に作成したユーザー名とパスワードを使用してログインします。

注意： デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインするには、管理者またはスーパーユーザーの権限が必要です。他のユーザーが Reader Extensions ES2 Web アプリケーションにアクセスできるようにするには、User Management でユーザーを作成し、そのユーザーに Reader Extensions Web アプリケーションロールを付与する必要があります。

▶ Workspace ES2 にアクセスするには：

- ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://localhost:[port]/workspace
```

WebLogic の場合、[port] は管理対象 WebLogic Server に割り当てられているポートです。

- LiveCycle ES2 用に作成したユーザー名とパスワードを使用してログインします。

▶ **Content Services ES2 Web アプリケーションにアクセスするには：**

注意：新しいユーザーがこの Web アプリケーションにログインできるように、LiveCycle Contentspace 管理者ロールまたは LiveCycle Contentspace ユーザーロールを適用する必要があります。ロールを適用するには、User Management でユーザーを作成して適切なロールを適用します。

1. ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
`http://localhost:[port]/contentspace`
WebLogic の場合、[port] は管理対象 WebLogic Server に割り当てられているポートです。
2. LiveCycle ES2 用に作成したユーザー名とパスワードを使用してログインします。

4.7 Workbench ES2 へのアップグレード

LiveCycle ES2 サーバーのアップグレードが完了し、適切に動作していることを確認したら、LiveCycle ES2 アプリケーションの作成と変更を引き続き行うために、新しいバージョンの Workbench ES2 をインストールする必要があります。『[Installing Your Development Environment](#)』を参照してください。

4.8 Rights Management ES2 へのアクセス

User Management で LiveCycle Rights Management End User ロールのユーザーを作成し、そのユーザーに関連付けられたログイン情報を使用して Rights Management ES2 の管理者またはエンドユーザーアプリケーションにログインする必要があります。

注意：デフォルトの管理者ユーザーは、Rights Management ES2 エンドユーザー Web アプリケーションにはアクセスできません。ただし、このユーザーのプロファイルに必要なロールを追加できます。新しいユーザーを作成したり、既存のユーザーを修正したりするには、LiveCycle 管理コンソールを使用します。

▶ **クライアントアプリケーション JAR ファイルの再パッケージ化：**

アップグレード後に LiveCycle ES バージョン 8.0 Java クライアントアプリケーションを実行するには、既存の `adobe-rightsmanagement-client.jar` および `adobe-livecycle-client.jar` を LiveCycle ES2 バージョンに置き換え、アプリケーションを再コンパイルする必要があります。

注意：クライアントアプリケーションの更新に失敗すると、次の例外が発生します。

```
com.adobe.edc.common.dto.AuditSpec; local class incompatible: stream
classdesc serialVersionUID = -6839645748622739902, local class
serialVersionUID = -7778215071249017043
```

▶ **Rights Management ES2 エンドユーザー Web アプリケーションにアクセスするには：**

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
`http://[server]:[port]/edc/Login.do`
ここで、[port] は WebLogic 管理対象サーバーに割り当てられているポートです。

▶ **Rights Management ES2 管理 Web アプリケーションにアクセスするには：**

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
`http://[server]:[port]/adminui`
ここで、[port] は管理対象 WebLogic Server に割り当てられているポートです。
2. サービス / LiveCycle Rights Management ES2 をクリックします。Rights Management ES2 でのユーザーおよびロールの設定については、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

▶ LiveCycle Rights Management End User ロールをアサインするには

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(36 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
3. 「キーワード」ボックスにすべてのと入力し、「条件 2」リストで「グループ」を選択します。
4. 「検索」をクリックし、該当するドメインについて、表示されるリストの「すべてのプリンシパル」をクリックします。
5. 「ロールアサイン」タブをクリックし、「ロールを検索」をクリックします。
6. ロールのリストで、「LiveCycle Rights Management End User」の横にあるチェックボックスを選択します。
7. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。

4.9 User Management へのアクセス

管理者は、User Management を使用して、1 つ以上のサードパーティユーザーディレクトリと同期するすべてのユーザーおよびグループのデータベースを管理できます。User Management には、Reader Extensions ES2、Workspace ES2、Rights Management ES2、Process Management ES2、Forms ES2、PDF Generator ES2、PDF Generator 3D ES2 および Content Services ES2 などの LiveCycle ES2 モジュールのユーザー認証、権限付与およびユーザー管理の機能があります。

▶ User Management にアクセスするには：

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. ホームページで、設定 / User Management をクリックします。

注意： User Management でのユーザー設定について詳しくは、User Management ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックしてください。

4.10 LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定

LiveCycle PDF Generator ES2 または LiveCycle PDF Generator 3D ES2 を LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールしている場合は、次のタスクを実行します。

- [「環境変数の設定」\(41 ページ\)](#)
- [「HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定」\(42 ページ\)](#)
- [「Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定」\(42 ページ\)](#)
- [「Acrobat Professional の設定」\(42 ページ\)](#)
- [「マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定」\(43 ページ\)](#)
- [「Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには」\(44 ページ\)](#)
- [「PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加」\(45 ページ\)](#)
- [「ネットワークプリンタクライアントのインストール」\(48 ページ\)](#)
- [「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(49 ページ\)](#)

4.10.1 環境変数の設定

PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 モジュールをインストールして、ファイルを PDF に変換するように設定した場合、一部のファイル形式については、環境変数を手動で設定して、対応するアプリケーションの起動に使用する実行ファイルの絶対パスを含める必要があります。次の表に、PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 で環境変数を設定する必要があるネイティブアプリケーションを示します。

アプリケーション	環境変数	例
Acrobat	Acrobat_PATH	C:¥Program Files¥Adobe¥Acrobat 9.0¥Acrobat¥Acrobat.exe 注意： 環境変数 Acrobat_PATH は大文字と小文字が区別されます。
Adobe FrameMaker®	FrameMaker_PATH	C:¥Program Files¥Adobe¥FrameMaker7.1¥FrameMaker.exe
メモ帳	Notepad_PATH	C:¥WINDOWS¥Notepad.exe 注意： Notepad_PATH 変数は空欄でかまいません。
OpenOffice	OpenOffice_PATH	C:¥Program Files¥OpenOffice.org 3
Adobe PageMaker®	PageMaker_PATH	C:¥Program Files¥Adobe¥PageMaker 7.0¥PageMaker.exe
WordPerfect	WordPerfect_PATH	C:¥Program Files¥WordPerfect Office 12¥Programs¥wpwin12.exe

注意： 環境変数 OpenOffice_PATH は、実行ファイルのパスではなく、インストールフォルダのパスに設定します。

Word、PowerPoint、Excel、Visio、Project などの Microsoft Office アプリケーションや AutoCAD のパスを設定する必要はありません。これらのアプリケーションがサーバーにインストールされている場合は、Generate PDF サービスが自動的にこれらのアプリケーションを起動します。

▶ 新しい Windows 環境変数を作成するには

1. スタート/コントロールパネル/システムを選択します。
2. 「詳細設定」タブをクリックして、「環境変数」をクリックします。
3. 「システム環境変数」セクションで、「新規」ボタンをクリックします。
4. 設定が必要な環境変数の名前（例えば、Photoshop_PATH など）を入力します。このフォルダは、実行ファイルを含むフォルダです。例えば、次のコードを入力します。

```
D:¥Program Files¥Adobe¥Adobe Photoshop CS4¥Photoshop.exe
```

▶ Linux または UNIX で PATH 変数を設定するには (OpenOffice のみ) :

- 次のコマンドを入力します。

```
export OpenOffice_PATH=/opt/openoffice.org3
```

4.10.2 HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定

LiveCycle ES2 が実行されているコンピュータが、プロキシ設定を使用して外部 Web サイトにアクセスしている場合、アプリケーションサーバーは、次の値を Java 仮想マシン (JVM) 引数として設定して起動する必要があります。

```
-Dhttp.proxyHost=[server host]
-Dhttp.proxyPort=[server port]
```

アプリケーションサーバーを HTTP プロキシホスト設定で起動するには、次の手順を完了します。

▶ スタンドアロンの WebLogic に設定を追加するには：

1. WebLogic が実行されている場合は停止します。
2. コマンドラインから、[WL_HOME]¥user_projects¥[your-domain]¥bin ディレクトリ内の startWebLogic スクリプトを編集します。
 - (Windows) startWebLogic.cmd
 - (Linux、UNIX) startWebLogic.sh
3. 次のテキストをスクリプトファイルに追加します。
 - (Windows)

```
set PROXY_SETTINGS=-Dhttp.proxyHost=<hostname> -Dhttp.proxyPort=[port]
```
 - (Linux、UNIX)

```
PROXY_SETTINGS=-Dhttp.proxyHost=<hostname> -Dhttp.proxyPort=[port]
```
4. ファイルを保存して閉じ、WebLogic を再起動します。

4.10.3 Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定

Adobe PDF プリンタを、サーバーのデフォルトプリンタに設定する必要があります。Adobe PDF プリンタがデフォルトとして設定されていない場合、PDF Generator ES2 ではファイルを変換できません。

▶ デフォルトのプリンタを設定するには

1. スタート/プリンタと FAX を選択します。
2. プリンタと FAX ウィンドウで、「Adobe PDF」を右クリックして「通常使うプリンタに設定」を選択します。

4.10.4 Acrobat Professional の設定

この手順は、LiveCycle ES2 のインストールを完了後に Acrobat 9.0 へのアップグレードまたはインストールを行った場合にのみ必要です。Acrobat のアップグレードは、LiveCycle Configuration Manager を実行してアプリケーションサーバーに LiveCycle ES2 をデプロイした後に実行できます。Acrobat Professional のルートディレクトリは、[Acrobat root] と表記します。通常、ルートディレクトリは C:¥Program Files¥Adobe¥Acrobat 9.0¥Acrobat です。

▶ PDF Generator で使用するために Acrobat を設定するには：

1. Acrobat の以前のバージョンがインストールされている場合、Windows コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して Acrobat をアンインストールします。

2. 次のいずれかを実行します。
 - メディアを使用する場合は、Acrobat の CD を挿入します。
 - ESD ダウンロードを使用している場合は、ESD の場所から Acrobat をダウンロードします。
3. AutoPlay.exe ファイルを実行して、Acrobat をインストールします。
4. LiveCycle ES2 インストールメディアの additional¥scripts フォルダに移動します。
次のバッチファイルを実行します。`Acrobat_for_PDFG_Configuration.bat`
`[LiveCycleES2 root]/pdfg_config`
5. Acrobat を開き、ヘルプ/アップデートの有無をチェック/環境設定を選択します。
6. 「自動的に新しいアップデートを確認する」を選択解除します。

▶ Acrobat のインストールを検証するには：

1. システム上の PDF ファイルに移動し、そのファイルをダブルクリックして Acrobat で開きます。PDF ファイルが正常に開いた場合は、Acrobat が正しくインストールされています。
2. PDF ファイルを正しく開くことができない場合は、Acrobat をアンインストールしてから再インストールします。

注意： Acrobat のインストール完了後に表示される Acrobat のすべてのダイアログボックスを閉じてから、Acrobat の自動アップデートを無効化してください。

環境変数 `Acrobat_PATH` を、Acrobat.exe を指すように設定してください（例えば、`C:¥Program Files¥Adobe¥Acrobat 9.0¥Acrobat¥Acrobat.exe`）。

▶ ネイティブアプリケーションサポートを設定するには

1. 前の手順で説明したように、Acrobat をインストールして検証します。
2. Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定します。
3. (PDF Generator 3D ES2) `[LiveCycleES2 root]¥plugins¥x86_win32¥`にある DLL ファイルを登録します。
`PDFG3dAddin.dll`にある DLL ファイルを登録します。

4.10.5 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定

デフォルトでは、PDF Generator ES2 は、一度に 1 つの OpenOffice、Microsoft Word または PowerPoint ドキュメントのみを変換できます。マルチスレッド変換を有効にすると、OpenOffice または PDFMaker の複数のインスタンスを起動して PDF Generator ES2 で同時に複数のドキュメントを変換できます (PDFMaker は、Word 文書と PowerPoint ドキュメントの変換に使用されます)。

注意： マルチスレッドファイル変換は、Microsoft Word 2007 および Microsoft PowerPoint 2007 のみでサポートされています。Microsoft Excel 2003 および Microsoft Excel 2007 ではサポートされていません。

マルチスレッドファイル変換を有効にするには、『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』ガイドの「マルチスレッドファイル変換の有効化」の節で説明されているタスクを実行する必要があります。

Linux および Solaris ユーザーの場合、ユーザーを作成して、パスワードプロンプトが表示されないように追加設定を指定する必要があります。

▶ ユーザーアカウントの追加：

1. LiveCycle Configuration Manager で、サービス/LiveCycle PDF Generator ES2/ユーザーアカウントをクリックします。
2. 「追加」をクリックし、LiveCycle ES2 サーバー上での管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。OpenOffice のユーザーを設定する場合は、最初に表示される OpenOffice のアクティベート用のダイアログを閉じます。

注意： OpenOffice のユーザーを設定する場合、OpenOffice のインスタンス数を、この手順で指定したユーザーアカウント数よりも大きくすることはできません。

3. LiveCycle ES2 サーバーを再起動します。

▶ Linux または Solaris での OpenOffice に必要な追加設定

1. 上記の説明に従って、ユーザーアカウントを追加します。
2. /etc/sudoers ファイルで、追加のユーザー (LiveCycle ES2 サーバーを実行する管理者以外) のエントリを追加します。例えば、ユーザー lcadm サーバー myhost として LiveCycle ES2 を実行している場合、user1 および user2 として動作させるには、/etc/sudoers に次のエントリを追加します。

```
lcadm myhost=(user1) NOPASSWD: ALL  
lcadm myhost=(user2) NOPASSWD: ALL
```

この設定により、lcadm は、ホスト myhost において user1 または user2 として、パスワードの入力を求められることなくすべてのコマンドを実行できるようになります。

3. 「ユーザーアカウントの追加」で追加したすべてのユーザーが LiveCycle ES2 サーバーに接続できるようにします。例えば、user1 というローカルユーザーに LiveCycle ES2 サーバーに接続する権限を許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +local:user1@
```

詳しくは、xhost コマンドのドキュメントを参照してください。

4. サーバーを再起動します。

4.10.6 Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには

PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 を使用して HTML ファイルを PDF に変換すると、日本語、韓国語、中国語などの一部の東アジア言語は、アラビア語、アルメニア語、グルジア語、ヘブライ語、インド系言語、タイ語、ベトナム語などの右から左方向に書く言語同様、PDF ファイルに表示されない可能性があります。

これらの言語を Windows Server 2003 で正常に表示するには、クライアントおよびサーバーに適切なフォントが必要です。

▶ Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには

1. スタート/コントロールパネル/地域と言語のオプションを選択します。
2. 「言語」タブをクリックし、「東アジア言語のファイルをインストールする」を選択します。
3. 「詳細設定」タブをクリックし、「コードページ変換テーブル」のすべてのオプションを選択します。

変換された PDF ファイルで依然としてフォントが正しく表示されない場合は、C:\WINDOWS\Fonts ディレクトリに Arial Unicode MS (True Type) フォント (ARIALUNI.TTF) があることを確認します。

4.10.7 PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加

LiveCycle ES2 には、Adobe LiveCycle ES2 Fonts Management というフォントの中央リポジトリがあり、すべての LiveCycle ES2 モジュールからアクセスできます。サーバー上の LiveCycle ES2 以外のアプリケーションで、追加フォントを使用できるように設定します。これにより、PDF Generator では、そのアプリケーションを使用して作成された PDF ドキュメントで追加フォントを使用できるようになります。

4.10.7.1 LiveCycle 以外のアプリケーション

次のリストには、PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 でサーバー側の PDF 生成に使用できる LiveCycle ES2 以外のアプリケーションが含まれています。

Windows 専用アプリケーション

- Microsoft Office Word
- Microsoft Office Excel
- Microsoft Office PowerPoint
- Microsoft Office Project
- Microsoft Office Visio
- Microsoft Office Publisher
- AutoDesk AutoCAD
- Corel WordPerfect
- Adobe Photoshop CS
- Adobe FrameMaker
- Adobe PageMaker
- Adobe Acrobat Professional Extended

マルチプラットフォームアプリケーション

- OpenOffice Writer
- OpenOffice Calc
- OpenOffice Draw
- OpenOffice Impress

注意：これらのアプリケーションの他にも、各ユーザーが追加したアプリケーションが含まれている場合があります。

上記のアプリケーションのうち OpenOffice スイート (Writer、Calc、Draw および Impress) は、他のアプリケーションが Windows にのみ対応しているのに対して、Windows、Solaris および Linux プラットフォームに対応しています。

4.10.7.2 Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加

上記のすべての Windows 専用アプリケーションでは、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダにあるすべてのフォントにアクセスできます。これらのアプリケーションには、C:\Windows\Fonts に加えて、それぞれ固有のフォントフォルダが存在する場合があります。

このため、LiveCycle ES2 フォントディレクトリにカスタムフォントを追加する場合、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダにそのフォントをコピーして、Windows 専用のアプリケーションでもこれらのフォントを使用できるようにする必要があります。

カスタムフォントの使用に際しては、使用許諾契約に基づくライセンスを取得して、そのフォントにアクセスするアプリケーションでの使用が許可されている必要があります。

4.10.7.3 OpenOffice スイートへの新しいフォントの追加

OpenOffice スイートへのカスタムフォントの追加方法は、OpenOffice Fonts-FAQ ページ (<http://wiki.services.openoffice.org>) で説明されています。

また、OpenOffice スイートには、フォント関連の動作に関して次のようなリソースがあります。

- 「OpenOffice Fonts Troubleshooting Guide」 (<http://www.openoffice.org/FAQs/fontguide.html>)。このガイドの項目の一部は OpenOffice 1.x にのみ適用されます。したがって、OpenOffice 3.x 以降に関しては情報が古くなっている可能性があります。
- 「Importing Fonts into OpenOffice 2.1」 (http://openoffice.blogspot.com/openoffice/2007/02/font_import_wiz.html) このブログは OpenOffice 2.1 を対象としていますが、内容は OpenOffice 2.2 以降にも適用されます。

4.10.7.4 その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加

他のアプリケーションに PDF 作成のサポートを追加した場合、これらのアプリケーションのヘルプを参照して新しいフォントを追加します。Windows では、通常はカスタムフォントを C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダに追加すれば十分です。

4.10.8 HTML から PDF への変換の設定

HTML から PDF への変換プロセスは、Acrobat 9 の設定を使用するように設計されています。この設定は、LiveCycle PDF Generator ES2 の設定よりも優先されます。

注意： この設定は、HTML から PDF への変換プロセスを有効にするために必要です。設定が行われていない場合、この変換タイプは失敗します。

▶ HTML から PDF への変換を設定するには

1. [「Acrobat Professional の設定」\(42 ページ\)](#) の説明に従って、Acrobat をインストールして検証します。
2. [LiveCycleES2 root]\plugins\x86win_32 ディレクトリにある pdfgen.api ファイルを探し、[Acrobat root]\Acrobat\plug_ins ディレクトリにコピーします。

4.10.8.1 HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート

警告： 入力用 zip ファイルにファイル名が 2 バイト文字の HTML ファイルが含まれている場合、HTML から PDF への変換は失敗します。この問題を回避するには、HTML ファイルに名前を付けるときに 2 バイト文字を使用しないようにします。

1. Unicode フォントを、使用しているシステムに応じて、次のいずれかのディレクトリにコピーします。
 - Windows
[Windows root]\windows\fonts
[Windows root]\winnt\fonts

- UNIX

- /usr/X/lib/X11/fonts/TrueType
- /usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType
- /usr/share/fonts/default/TrueType
- /usr/X11R6/lib/X11/fonts/ttf
- /usr/X11R6/lib/X11/fonts/truetype
- /usr/X11R6/lib/X11/fonts/TrueType
- /usr/X11R6/lib/X11/fonts/TTF
- /Users/cfqauser/Library/Fonts
- /System/Library/Fonts
- /Library/Fonts
- /Users/ + System.getProperty(<user name>, root) + /Library/Fonts
- System.getProperty(JAVA_HOME) + /lib/fonts
- /usr/share/fonts (Solaris)

注意： /usr/lib/X11/fonts ディレクトリが存在することを確認します。ディレクトリがない場合は、ln コマンドを使用して /usr/share/X11/fonts から /usr/lib/X11/fonts へのシンボリックリンクを作成します。

2. [LiveCycleES2 root]/adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルにある cffont.properties ファイルで、フォント名マッピングを変更します。

- このアーカイブを展開し、cffont.properties ファイルを探して、エディタで開きます。
- Java フォント名のカンマ区切りリストで、フォントタイプごとに、Unicode システムフォントにマップを追加します。以下の例では、kochi mincho が Unicode システムフォントの名前です。

```
dialog=Arial, Helvetica, kochi mincho
dialog.bold=Arial Bold, Helvetica-Bold, kochi mincho ...
```
- プロパティファイルを保存して閉じ、adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルを再パッケージ化して再デプロイします。

注意： 日本語のオペレーティングシステムでは、cffont.properties.ja ファイルでもフォントマッピングを指定します。これは、標準の cffont.properties ファイルよりも優先されます。

ヒント： リスト内のフォントは、左から右に検索され、最初に見つかったフォントが使用されます。HTML から PDF の変換ログでは、システム内で見つかったすべてのフォント名のリストが返されます。マップが必要なフォント名を特定するには、前述したいずれかのディレクトリにフォントを追加し、サーバーを再起動して変換を実行します。マッピングに使用するフォント名は、ログファイルから特定できます。

生成された PDF ファイルにフォントを埋め込むには、cffont.properties ファイル内の embedFonts プロパティを true に設定します (デフォルトは false)。

4.10.9 Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する

マクロを含む Microsoft Visio 2007 のファイルを変換しようとすると、Microsoft Office Visio のセキュリティに関する通知ダイアログが表示され、変換がタイムアウトします。マクロが含まれているファイルを正常に変換するには、Visio のデフォルトのマクロ設定を変更する必要があります。

▶ Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する

- Visio 2007 で、ツール／セキュリティセンター／マクロの設定をクリックし、次のいずれかのオプションを選択して、「OK」をクリックします。
 - 警告を表示せずにすべてのマクロを無効にする
 - すべてのマクロを有効にする

4.10.10 ネットワークプリンタクライアントのインストール

PDF Generator ES2 には、クライアントコンピュータに PDF Generator ES2 ネットワークプリンタをインストールするための実行ファイルが含まれています。インストールが完了すると、PDF Generator ES2 プリンタがクライアントコンピュータの既存のプリンタのリストに追加されます。その後、このプリンタを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。

注意： PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアント (ウィザード) は、32 ビットの Windows プラットフォームのみでサポートされています。

Windows で PDFG ネットワークプリンタのインストールが失敗する場合や、プリンタを UNIX または Linux のプラットフォームにインストールする場合は、各オペレーティングシステムのネイティブのプリンタ追加ユーティリティを使用して、[「Windows でネイティブのプリンタの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンタを設定するには」](#) (48 ページ) の説明に従って設定してください。

▶ PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアントをインストールするには

1. PDF Generator ES2 をサーバーに正常にインストールしたことを確認します。
2. Windows クライアントコンピュータから、Web ブラウザに次の URL を入力します。[server] は PDF Generator ES2 をインストールしたサーバーの名前、[port] は使用しているアプリケーションサーバーポートです。

`http:// [server] : [port] /pdfg-ipp/install`

3. インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択して、PDFG 管理者またはユーザーのロールを持つ LiveCycle ユーザーの資格情報を指定します。このユーザーには電子メールアドレスも必要です。このアドレスは、変換済みのファイルを受信する際に使用できます。このセキュリティ設定をクライアントコンピュータ上のすべてのユーザーに適用するには、「すべてのユーザーに同じセキュリティ設定を使う」を選択して、「OK」をクリックします。

インストールが終了すると、Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 が正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。使用可能なプリンタのリストに Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 という名前のプリンタが追加されます。

▶ Windows でネイティブのプリンタの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンタを設定するには

1. スタート／プリンタと FAX をクリックし、「プリンタの追加」をダブルクリックします。
2. 「次へ」をクリックし、「ネットワークプリンタ、またはほかのコンピュータに接続されているプリンタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
3. 「インターネット上または自宅 / 会社のネットワーク上のプリンタに接続する」を選択し、次の PDFG プリンタの URL を入力します。[server] はサーバー名、[port] はサーバーを実行しているポート番号です。

`http:// [server] : [port] /pdfg-ipp/printer`

4. インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択し、ユーザーの有効な資格情報を指定します。
 5. 「プリンタドライバの選択」ボックスで、任意の標準的な PostScript ベースのプリンタドライバ (HP Color LaserJet PS など) を選択します。
 6. 適切なオプション (このプリンタをデフォルトに設定するなど) を選択してインストールを完了します。
- 注意：** プリンタの追加の際に使用するユーザーの資格情報では、応答を受信するために、有効な電子メール ID を User Management で設定する必要があります。
7. 電子メールサービスの sendmail サービスを設定します。サービスの設定オプションで有効な SMTP サーバーと認証情報を指定します。
- ▶ プロキシサーバーのポート転送を使用するように PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアントをインストールして設定するには
1. CC プロキシサーバーで特定のポートについて LiveCycle ES2 サーバーへのポート転送を設定し、プロキシサーバーレベルで認証を無効にします (LiveCycle ES2 で独自の認証を使用するため)。転送を設定したポートでクライアントがこのプロキシサーバーに接続すると、すべての要求が LiveCycle ES2 サーバーに転送されます。
 2. 次の URL を使用して、PDFG ネットワークプリンタをインストールします。
`http://[proxy server]:[forwarded port]/pdfg-ipp/install.`
 3. PDFG ネットワークプリンタの認証に必要な資格情報を指定します。
 4. PDFG ネットワークプリンタがクライアントマシンにインストールされます。これにより、ファイアウォールで保護されている LiveCycle ES2 サーバーを使用した PDF 変換が可能になります。

4.10.11 監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定

監視フォルダを使用した PDF の変換を実行するための十分なディスク容量がないことを示す `java.io.IOException` エラーメッセージが発生しないように、LiveCycle 管理コンソールで PDF Generator の設定を変更できます。

- ▶ PDF Generator のパフォーマンスパラメータを設定するには：
1. LiveCycle 管理コンソールにログインし、サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理をクリックします。
 2. サービスのリストで **PDFGConfigService** を探してクリックし、以下の値を設定します。
 - **PDFG Cleanup Scan Seconds** : 1800
 - **Job Expiration Seconds** : 6000
 - **Server Conversion Timeout** : デフォルト値の 270 から 450 などの大きい値に変更します。
 3. 「保存」をクリックして、サーバーを再起動します。

4.11 Forms ES2 キャッシュのリセット

Forms ES を含む LiveCycle ES (8.x) システムをアップグレードした後で、Forms ES2 キャッシュをリセットすることをお勧めします。これは、移行されたプロセスでフォームを生成する際に発生する可能性のある問題を回避するための操作です。

- サービス / LiveCycle Forms ES2 / フォームキャッシュコントロールの設定をクリックして、LiveCycle 管理コンソールの「キャッシュをリセット」ボタンを使用します。

4.12 LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定

アップグレード時、LDAP を使用した認証をサポートするように User Management を設定する際は、次の手順をガイドラインとして使用します。

▶ LDAP に対応するように User Management を設定するには (エンタープライズドメイン)

1. Web ブラウザを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) に移動してログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(36 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定 / ユーザー管理 / ドメインの管理をクリックし、「新規エンタープライズドメイン」をクリックします。
3. 「ID」ボックスにドメインの一意の ID を入力し、「名前」ボックスにドメインの識別名を入力します。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

4. 「認証を追加」をクリックし、「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに、LDAP プロファイルの名前を入力します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」の各ボックスに値を指定し、「ページに次の情報を入力」ボックスで、ディレクトリ設定オプション (「Sun ONE のデフォルト値」など) を選択します。また、「名前」ボックスと「パスワード」ボックスで、匿名アクセスが無効な場合に LDAP データベースへの接続に使用する値を指定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
9. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。画面に、サーバーのテストが成功したか、または設定エラーが存在することを示すメッセージが表示されます。
10. 「次へ」をクリックして、必要に応じて、「ユーザー設定」を設定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
11. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。
 - 「検索フィルタ」ボックスで、検索フィルタを確認するか新しい検索フィルタを指定してから、「送信」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「閉じる」をクリックしてユーザー設定画面に戻ります。

12. 「次へ」をクリックして、必要に応じて、「グループ設定」を設定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
13. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。
 - 「検索フィルタ」ボックスで、検索フィルタを確認するか新しい検索フィルタを指定してから、「送信」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「閉じる」をクリックしてグループの設定画面に戻ります。
14. 「完了」をクリックして新規ディレクトリページを閉じ、「OK」をクリックして終了します。

▶ **User Management を設定するには (ローカルドメイン) :**

1. Web ブラウザを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) に移動してログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(36 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定/ユーザー管理/ドメインの管理をクリックし、「新規ローカルドメイン」をクリックします。
3. 該当するボックスにドメイン ID とドメイン名を入力します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ローカルドメインの追加」を参照)。
4. (オプション)「アカウントロックを有効にする」オプションの選択を解除して、アカウントロックを無効にします。
5. 「OK」をクリックします。

4.13 LiveCycle 7.x からアップグレードする場合の考慮事項

LiveCycle 7.x または 8.x から LiveCycle ES2 Process Management にアップグレードする場合、正常な機能を復元するためには、電子メール関連のいくつかの設定を手動で行う必要があります。そのため、Form Manager 7.x または Process Management 8.x で、次に示すユーザーの環境設定のいずれかを設定していた場合は、ここで説明する手順に従って、これらの設定を手動で設定する必要があります。

▶ **電子メールの添付形式 :**

電子メールの添付形式設定では、電子メール通知メッセージにフォームのコピーを添付するかどうかを指定します。これにより、ユーザーはフォームの内容 (タスク) を編集してから、電子メールで送信することができます。

注意 : PDF および XDP の添付ファイルのみがサポートされています。

アップグレード後に電子メールでタスクを送信するには、次の手順に従い、Workspace ES2 でユーザーごとに環境設定を設定する必要があります。

1. [http://\[host\]:\[port\]/workspace](http://[host]:[port]/workspace) に移動して、Workspace ES2 アプリケーションにログインします。
2. 環境設定/UI 設定の管理に移動します。
3. 「電子メールの添付形式」の値を「はい」に設定します。

LiveCycle ES2 では電子メールタスクの管理方法が変更されているため、LiveCycle Administrator のユーザーは、Complete Task の電子メールエンドポイントを作成して、Form Manager 7.x で作成された、電子メールによるユーザーの操作を必要とするプロセスを実行できるようにする必要があります。

▶ Complete Task の電子メールエンドポイント :

1. [http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) に移動して、LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動し、「Complete Task: 1.0」サービスをクリックします。
3. Configure Complete Task 画面で、「エンドポイント」タブをクリックし、リストから「電子メール」を選択して、「追加」をクリックします。
4. 必要に応じてエンドポイントを設定し、「追加」をクリックします。
5. 必要に応じて、サービス／アプリケーションおよびサービス／エンドポイントの管理に移動し、新しいエンドポイントを有効にします。

アップグレードプロセス中に、タスクの割り当てとリマインダ電子メールの設定がデフォルト値に戻ります。

4.14 クライアント JAR ファイルの再パッケージ化

WebLogic の問題により、LiveCycle Assembler 7.x 用に作成されたクライアントアプリケーションは、WebLogic で実行されている LiveCycle ES2 ではサポートされません。これらのアプリケーションを引き続き使用するには、LiveCycle ES2 に固有のクライアント JAR ファイルを使用して手動で更新する必要があります。

LiveCycle Assembler 用に作成されたクライアントアプリケーションは、Forms ES2、PDF Generator ES2 または Output ES2 モジュールによってサポートされています。

次の表に、現在 LiveCycle Assembler 7.x クライアントアプリケーションに含まれている JAR ファイルおよび各ファイルと置き換える必要がある JAR ファイルを示します。新しいクライアント JAR ファイルは、[LiveCycleES2 root]/LiveCycle_ES_SDK/client-libs/common ディレクトリにあります。

LiveCycle 7.x JAR ファイル	置換ファイル
adobe-common.jar	adobe-docmanager-client.jar
AdobeCSAUtils.jar	adobe-log.jar adobe-utilities.jar
datamanager-client.jar	adobe-datamanager-client.jar
DocumentServicesLibrary.jar	adobe-bmc-client.jar

4.15 FIPS モードの有効化

LiveCycle ES2 には FIPS モードがあり、RSA BSAFE Crypto-C 2.1 暗号化モジュールを使用して、データ保護を連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 承認アルゴリズムに限定しています。

LiveCycle ES2 の設定中に LiveCycle Configuration Manager を使用してこのオプションを有効化しなかった場合、または有効化した設定を無効化する場合は、LiveCycle 管理コンソールからこの設定を変更できます。

FIPS モードを変更した場合は、サーバーを再起動する必要があります。

FIPS モードでは、Acrobat のバージョン 7.0 以前はサポートされていません。FIPS モードが有効になっており、パスワードを使用した暗号化およびパスワードの削除の各プロセスに Acrobat 5 の設定が含まれている場合、プロセスは失敗します。

通常、FIPS が有効化されていると、Assembler サービスでは、どのドキュメントにもパスワードの暗号化が適用されません。この処理が試行されると、`FIPSMODEException` が発生し、FIPS モードではパスワードを暗号化できないことが示されます。また、ベースドキュメントがパスワードで暗号化されている場合、`PDFsFromBookmarks` エレメントは FIPS モードではサポートされません。

▶ **FIPS モードをオンまたはオフにするには**

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. 設定／コアシステム設定／設定をクリックします。
3. 「FIPS を有効にする」を選択して FIPS モードを有効化するか、選択を解除して FIPS モードを無効化します。
4. 「OK」をクリックして、アプリケーションサーバーを再起動します。

注意： LiveCycle ES2 ソフトウェアでは、FIPS の互換性を確認するためのコードの検証を行いません。FIPS 操作モードは、FIPS で承認されたライブラリ (RSA) の暗号化サービスで、FIPS で承認されたアルゴリズムが使用されるようにするために提供されています。

4.16 HTML 電子署名の設定

Forms ES2 の HTML 電子署名機能を使用するには、次の手順を実行します。

▶ **HTML 電子署名を有効にするには**

1. `[LivecycleES2 root]/deploy/adobe-forms-ds.ear` ファイルをアプリケーションサーバーに手動でデプロイします。
2. LiveCycle 管理コンソールにログインし、サービス／LiveCycle Forms ES2 をクリックします。
3. 「HTML 電子署名が有効です」を選択し、「保存」をクリックします。

4.17 Document Management サービスの設定

Content Services ES2 をインストールし、アプリケーションサーバーがデフォルト以外のポートで動作している場合は、Document Management サービスで使用するポートを変更します。

▶ **ポートを変更するには**

1. LiveCycle 管理コンソールにログインし、サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理をクリックします。
2. リストで「DocumentManagementService」を選択します。
3. 「設定」タブの「HTTP ポート」ボックスで、使用しているポート番号を指定して、「保存」をクリックします。

4.18 Connector for EMC Documentum サービスの設定

注意： LiveCycle ES2 でサポートされる EMC Documentum のバージョンは、6.0 および 6.5 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for EMC Documentum サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、Documentum リポジトリに接続するようサービスを設定します。

▶ Connector for EMC Documentum を設定するには

1. [appserverdomain]/bin フォルダにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。
2. 次の Documentum Foundation Classes JAR ファイルを指定する新しいシステムプロパティを追加します。

- dfc.jar
- aspectjrt.jar
- log4j.jar
- jaxb-api.jar
- (Connector for EMC Documentum 6.5 のみ)
 - configservice-impl.jar
 - configservice-api.jar

新しいシステムプロパティは、次の形式にする必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの Content Server と Documentum Foundation Classes のインストールを使用して、次のいずれかのシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾は改行にしてください。

- Connector for EMC Documentum 6.0 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar
```

- Connector for EMC Documentum 6.5 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar
```

注意：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー&ペーストする場合、改行を削除してください。

3. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://[host]/:[port]/adminui
```

4. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名： administrator

パスワード： password

5. サービス / LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum / 環境設定に移動して、次のタスクを実行します。
 - 必要な Documentum リポジトリ情報のすべてを入力します。
 - Documentum をリポジトリプロバイダとして使用するには、「リポジトリサービスプロバイダ」で「EMC Documentum リポジトリプロバイダ」を選択し、「保存」をクリックします（詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#) ページの右上隅にあるヘルプリンクをクリックしてください）。
6. (オプション) サービス / LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum / リポジトリ証明書の設定に移動して、「追加」をクリックし、Docbase 情報を指定して、「保存」をクリックします（詳しくは、右上隅の「ヘルプ」をクリックしてください）。
7. アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。
8. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
http://[host]/:[port]/adminui
9. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
ユーザー名 : administrator
パスワード : password
10. サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理に移動して、次のサービスを選択します。
 - EMCDocumentumAuthProviderService
 - EMCDocumentumContentRepositoryConnector
 - EMCDocumentumRepositoryProvider
11. 「起動」をクリックします。サービスのいずれかが正常に起動されない場合は、手順 5 で入力した設定を確認します。
12. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - Documentum Authorization サービス (EMCDocumentumAuthProviderService) を使用して、Workbench ES2 のリソースビューで Documentum リポジトリから内容を表示するには、この手順を続行します。Documentum Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、Documentum 秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - LiveCycle ES2 リポジトリを使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の秘密鍵証明書（デフォルトは「Administrator」と「password」）を使用して Workbench ES2 にログインします。
これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 5 で指定した秘密鍵証明書を使用してデフォルトリポジトリにアクセスし、デフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
13. 次のタスクを実行して、Remoting および EJB のエンドポイントを有効にします。
 - LiveCycle 管理コンソールにログインし、ホーム / サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理をクリックします。
 - 「Connector for EMC Documentum」カテゴリをフィルタして、「EMC DocumentumContentRepositoryConnector:1.0」をクリックします。
 - 無効になっているエンドポイントを選択して有効にします。
14. アプリケーションサーバーを再起動します。
15. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定 / User Management / ドメインの管理をクリックします。

16. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意：(WebSphere および WebLogic のみ) LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100 文字、2 バイト文字で 50 文字、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

17. カスタム認証プロバイダを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択します。
- 「EMCDocumentumAuthProvider」を選択し、「OK」をクリックします。

18. LDAP 認証プロバイダを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」を選択します。

19. LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。
- 「次へ」をクリックし、ユーザー設定を指定して「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックします。

20. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

21. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

22. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。

23. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックします。

24. 次の秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 を起動し、ログインします。

ユーザー名：[username]@[repository_name]

パスワード：[password]

これで、Documentum リポジトリが Workbench ES2 のリソースビューに表示されます。
[username]@[repository_name] を使用してログインしない場合、Workbench ES2 では、手順 5 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

25. (オプション) Connector for EMC Documentum の LiveCycle ES2 サンプルをインストールする場合、「Samples」という名前の Documentum リポジトリを作成してその中にインストールします。

Connector for EMC Documentum サービスを設定したら、Documentum リポジトリを使用した Workbench ES2 の機能の正しい設定について、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.19 Connector for IBM FileNet サービスの設定

LiveCycle ES2 でサポートされる IBM FileNet のバージョンは、4.0 および 4.5 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM FileNet サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、FileNet のオブジェクトストアに接続するようサービスを設定する必要があります。

FileNet 4.x を使用して Connector for IBM FileNet サービスを設定するには、次のいずれかの手順を選択します。

- [「FileNet 4.x および CEWS トランスポートを使用してコネクタを設定するには」 \(57 ページ\)](#)
- [「FileNet 4.x および EJB トランスポートを使用してコネクタを設定するには :」 \(61 ページ\)](#)

▶ FileNet 4.x および CEWS トランスポートを使用してコネクタを設定するには

1. 次の操作を実行します。
2. [appserverdomain]/config/config.xml ファイルを探し、そのバックアップコピーを作成します。
3. WebLogic Server Administration Console の「Domain Structure」で、Environment / Servers をクリックし、右側のウィンドウでサーバーの名前をクリックします。
4. 「Configuration」タブをクリックし、「Server Start」をクリックします。
5. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
6. 「Arguments」ボックスに次のテキストを入力し、「Save」をクリックします。

```
-Dwaspl.location= <configuration files location>
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次の Java オプションを追加します。

```
-Dwaspl.location=C:/Progra~1/FileNet/AE/CE_API/wsi
```

7. [appserverdomain]/bin フォルダにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。
8. 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
 - javaapi.jar
 - log4j-1.2.13.jar
 - soap.jar
 - wasp.jar
 - builtin_serialization.jar (FileNet 4.0 のみ)
 - wsdl_api.jar

- jaxm.jar
- jaxrpc.jar
- saaj.jar
- jetty.jar
- runner.jar
- p8cjares.jar
- Jace.jar
- (オプション) pe.jar

注意： pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

注意： プロパティファイルの既存のコンテンツを上書きしないでください。コンテンツに新しいシステムプロパティを追加します。

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

注意： 次のテキストには、改行が含まれています。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFileNet.ext=  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥CE_API¥lib2¥log4j-1.2.13.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/soap.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wasp.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/builtin_serialization.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wsdapi.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxm.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxrpc.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/saaj.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jetty.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/runner.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/p8cjares.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/Jace.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/pe.jar
```

注意： C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥Workplace¥WEB-INF¥lib¥pe.jar は、実際のデプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用している場合のみ追加します。

注意： FileNet 4.5 の場合は、C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/builtin_serialization.jar, の行を削除します。

9. (FileNet Process Engine Connector のみ) 次の手順で、プロセスエンジンの接続プロパティを設定します。

- テキストエディタを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを 1 行で入力します。末尾で改行してください。

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/  
wsi/FNCEWS40DIME/
```

- このファイルを WcmApiConfig.properties という名前で別のフォルダに保存して、そのフォルダの場所を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。
例えば、このファイルを c:\%pe_config%\WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:\%pe_config% を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

注意：ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

10. カスタム JAAS 設定ファイルが使用されている場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule  
    required authOnLogin=true;};  
FileNetP8WSI {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};  
FileNetP8Engine  
    {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required  
    authOnLogin=true;};  
FileNetP8Server  
    {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required  
    authOnLogin=true;};
```

ヒント：カスタム JAAS 設定ファイルが使用されているかどうかは、アプリケーションサーバーの start コマンドのプロパティ -Djava.security.auth.login.config の値で識別できます。

11. (FileNet Process Engine Connector のみ) この FileNet Process Engine Connector をデプロイメントで使用する場合、設定に応じて次のいずれかの手順を実行します。

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使わない場合、テキストエディタを使用して次のファイルを作成します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

このファイルを jaas.conf.WSI として保存して、その場所を、WebLogic Server start コマンドに次の Java オプションとして追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=<JAAS file location>
```

例えば、このファイルを C:\%pe_config%\jaas.conf.WSI として保存して、次の Java オプションを追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=C:/pe_config/jaas.conf.WSI
```

12. config.xml ファイルを開き、管理対象サーバーのユーザードメインの <credential-encrypted> 値を探します。このエレメントに値が設定されていない場合は、手順 2 で作成した config.xml ファイルのバックアップコピーを開き、<credential-encrypted> 値をコピーします。
13. 新しい config.xml ファイルに値を貼り付けてから、このファイルを保存して閉じます。
14. アプリケーションサーバーが実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。
15. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
`http:// [host] : [port] /adminui`
16. デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
ユーザー名： administrator
パスワード： password
17. サービス / LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet をクリックします。

18. 必要なすべての FileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリサービスプロバイダ」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダ」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注意：この手順で指定する秘密鍵証明書は、IBM FileNet リポジトリサービスを後で起動するときに検証されません。秘密鍵証明書が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。

19. 「保存」をクリックして、サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理に移動します。
20. IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合) の横のチェックボックスを選択して、「開始」をクリックします。
21. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench ES2 のリソースビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が書き換えられるため、FileNet の秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - LiveCycle ES2 リポジトリを使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の秘密鍵証明書 (デフォルトは「Administrator」と「password」) を使用して Workbench ES2 にログインします。この場合、手順 18 で指定した秘密鍵証明書は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
22. 次のタスクを実行して、Remoting および EJB のエンドポイントを有効にします。
 - LiveCycle 管理コンソールにログインし、ホーム/サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理をクリックします。
 - Connector for IBM FileNet カテゴリをフィルタリングして、「IBMFileNetContentRepositoryConnector:1.0」をクリックします。
 - 無効になっているエンドポイントを選択して有効にします。
23. アプリケーションサーバーを再起動します。
24. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定/User Management/ドメインの管理をクリックします。
25. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意：LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

26. カスタム認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択します。
 - 「IBMFileNetAuthProviderService」を選択し、「OK」をクリックします。
27. LDAP 認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

28. LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力して、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

29. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

30. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

31. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。

32. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

33. Workbench ES2 を起動して、IBM FileNet リポジトリ用の次の秘密鍵証明書を使用してログインします。

ユーザー名: [username]@[repository_name]

パスワード: [password]

これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench ES2 のリソースビューに表示されます。

[username]@[repository_name] を使用してログインしない場合、Workbench ES2 では、手順 18 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

34. (オプション) Connector for IBM FileNet の LiveCycle ES2 サンプルをインストールする場合、Samples という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールします。

Connector for IBM FileNet サービスを設定したら、FileNet リポジトリを使用した Workbench ES2 の機能の正しい設定について、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

▶ **FileNet 4.x および EJB トランスポートを使用してコネクタを設定するには：**

1. [appserverdomain]/config/config.xml ファイルを探し、そのバックアップコピーを作成します。
2. [appserverdomain]/bin フォルダにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。

3. 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。

- javaapi.jar
- log4j-1.2.13.jar
- p8cjares.jar
- Jace.jar
- (オプション) pe.jar

注意： pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

注意： 次のテキストには、改行が含まれています。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFileNet.ext=  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥CE_API¥lib2¥log4j-1.2.13.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥CE_API¥lib2¥p8cjares.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥CE_API¥lib¥Jace.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥Workplace¥WEB-INF¥lib¥pe.jar
```

注意： C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥Workplace¥WEB-INF¥lib¥pe.jar は、実際のデプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用している場合のみ追加します。

4. (FileNet Process Engine Connector のみ) テキストエディタを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを 1 行で入力します。末尾で改行してください。

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/  
wsi/FNCEWS40DIME/
```

5. 作成したファイルを WcmApiConfig.properties という名前での別のフォルダに保存して、そのフォルダの場所を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

例えば、このファイルを c:¥pe_config¥WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:¥pe_config を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

注意： ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

6. カスタム JAAS 設定ファイルが使用されている場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 { weblogic.security.auth.login.  
    UsernamePasswordLoginModule required authOnLogin=true; };  
FileNetP8WSI { com.filenet.api.util.WSILoginModule required; };  
FileNetP8Engine { weblogic.security.auth.login.  
    UsernamePasswordLoginModule required authOnLogin=true; };  
FileNetP8Server { weblogic.security.auth.login.  
    UsernamePasswordLoginModule required authOnLogin=true; };
```

ヒント： カスタム JAAS 設定ファイルが使用されているかどうかは、アプリケーションサーバーの start コマンドのプロパティ -Djava.security.auth.login.config の値で識別できます。

7. config.xml ファイルを開き、管理対象サーバーのユーザードメインの <credential-encrypted> 値を探します。このエレメントに値が設定されていない場合は、手順 2 で作成した config.xml ファイルのバックアップコピーを開き、<credential-encrypted> 値をコピーします。
8. 新しい config.xml ファイルに値を貼り付けてから、このファイルを保存して閉じます。
9. (FileNet Process Engine Connector のみ) この FileNet Process Engine Connector をデプロイメントで使用する場合、設定に応じて次のいずれかの手順を実行します。
 - カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required};
```
 - カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使わない場合、テキストエディタを使用して次のファイルを作成します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required};
```

このファイルを jaas.conf.WSI として保存して、その場所を、WebLogic Server start コマンドに次の Java オプションとして追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=<JAAS file location>
```

例えば、このファイルを C:%pe_config%jaas.conf.WSI として保存して、次の Java オプションを追加します。

```
-Djava.security.auth.login.config=C:/pe_config/jaas.conf.WSI
```
10. WebLogic Server が実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。
11. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://localhost:8001/adminui
```

 (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)
12. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名: administrator
パスワード: password
13. サービス / LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet をクリックします。
14. 必要なすべての FileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリサービスプロバイダ」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダ」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注意: この手順で指定する秘密鍵証明書は、IBM FileNet リポジトリサービスを後で起動するときに検証されます。秘密鍵証明書が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。
15. 「保存」をクリックします。
16. サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理に移動します。
17. 次の各サービスの横にあるチェックボックスを選択して「開始」をクリックします。
 - IBMFileNetAuthProviderService
 - IBMFileNetContentRepositoryConnector
 - IBMFileNetRepositoryProvider
 - IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)サービスのいずれかが正常に開始しない場合は、手順 14 で入力した設定を確認します。

18. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench ES2 のリソースビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、FileNet の秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - LiveCycle ES2 リポジトリを使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の秘密鍵証明書 (デフォルトは「Administrator」と「password」) を使用して Workbench ES2 にログインします。この場合、手順 14 で指定した秘密鍵証明書は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
19. WebLogic Server を再起動します。
20. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定 / User Management / ドメインの管理をクリックします。
21. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。
22. カスタム認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックし、「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択します。
 - 「IBMFileNetAuthProviderService」を選択して、「OK」をクリックします。
23. LDAP 認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。
24. LDAP ディレクトリを追加します。
 - 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力して、「次へ」をクリックします。
 - 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
 - (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
 - ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
25. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。
26. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。
27. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。

28. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

29. Workbench ES2 を起動し、次の秘密鍵証明書を使用してログインします。

ユーザー名: [username]@[repository_name]

パスワード: [password]

これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench ES2 のリソースビューに表示されます。

[username]@[repository_name] を使用してログインしない場合、Workbench ES2 では、手順 14 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

30. (オプション) Connector for IBM FileNet の LiveCycle ES2 サンプルをインストールする場合、Samples という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールする必要があります。

Connector for IBM FileNet サービスを設定したら、FileNet リポジトリを使用した Workbench ES2 の機能の正しい設定について、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.20 SharePoint クライアントアクセスの設定

Microsoft SharePoint クライアントを設定して、LiveCycle ES2 からコンテンツサービスにアクセスできます。そのためには、LiveCycle Configuration Manager を使用して、SharePoint Alfresco Module Package を追加します。SharePoint AMP ファイル (adobe-vti-module.amp) は、[LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥ContentServices フォルダにあります。

SharePoint AMP を追加した後で、次の手順を実行します。

4.20.1 share.war ファイルの取得と編集

Alfresco CMS では、share.war ファイルを使用して、Content Services ES2 に接続します。SharePoint クライアントが Content Services ES2 にアクセスできるようにするには、share.war ファイルを変更する必要があります。

1. Alfresco インストールから share.war を取得します。詳しくは、Alfresco のドキュメントを参照してください。
2. ファイルシステム内のディレクトリに share.war ファイルをコピーします。
3. WinRar などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、share.war ファイルを開きます。
4. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル WEB-INF/classes/alfresco/webscript-framework-config.xml を抽出し、テキストエディタで開きます。
5. 行 `<endpoint-url>http://localhost:8001/alfresco/s</endpoint-url>` を探して、これを `<endpoint-url>http://localhost:8001/contentspace/s</endpoint-url>` に変更します。
6. ファイルを保存して閉じます。

4.20.2 share.war ファイルのデプロイ

1. WinRar などのアーカイブユーティリティを使用し、アプリケーションサーバーに適した場所で、アーカイブファイル `adobe-contentservices.ear` を開きます。
 - (WebLogic) : `[appserver domain]¥servers¥<server-name>¥stage¥adobe-contentservices¥`
2. アーカイブユーティリティのウィンドウで開いた `adobe-contentservices.ear` アーカイブに、更新済みの `share.war` ファイルを追加します。
3. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウからローカルファイルシステムのフォルダに、ファイル `application.xml` を抽出して、テキストエディタで開きます。このファイルは、`adobe-contentservices.ear¥META-INF` ディレクトリにあります。
4. `<application>` タグの下に、次の行を追加します。

```
<module id="Share">
  <web>
    <web-uri>share.war</web-uri>
    <context-root>/share</context-root>
  </web>
</module>
```
5. 更新した `application.xml` ファイルを、`adobe-contentservices.ear` アーカイブにコピーして戻します。
6. アーカイブを保存して閉じます。
7. 更新した EAR ファイルをデプロイします。

注意： アプリケーションサーバーの管理コンソールを使用して、更新した EAR ファイルを手動でデプロイする必要があります。

4.21 IPv6 モードでの CIFS の有効化

IPv6 の実装で Content Services ES2 の CIFS を有効にする場合は、LiveCycle ES2 をホストするマシンに補足の IPv6 アドレスを明示的に追加する必要があります。この IPv6 アドレスは、クライアントと同じサブネットに存在する静的 IP アドレスであることが必要です。LiveCycle Configuration Manager を使用して LiveCycle ES2 を設定した後で、次のタスクを実行する必要があります。通常は、EAR ファイルの設定の後で LiveCycle Configuration Manager を一時停止してから、EAR ファイルを編集します。EAR ファイルを編集した後で LiveCycle Configuration Manager に戻り、更新した EAR ファイルを、選択した他の EAR ファイルと共にデプロイできます。

4.21.1 contentservices.war ファイルの編集

1. `[LiveCycleES2 root]¥configurationManager¥export` ディレクトリに移動します。
2. WinRar などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、`contentservices.war` ファイルを開きます。
3. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル `contentservices.war¥WEB-INF¥classes¥alfresco¥file-services-custom.xml` を抽出して、テキストエディタで開きます。
4. 次の行を探し、`ipv6="enabled"` を追加して、この行を変更します。

```
<tcpipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX"/>
これを次のように変更します。
<tcpipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX" ipv6="enabled"/>
```

5. ファイルを保存して閉じます。
6. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウからローカルファイルシステムのフォルダに、ファイル `contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension\file-servers-properties` を抽出して、テキストエディタで開きます。
7. 行 `cifs.ipv6=disabled` を探して、`cifs.ipv6=enabled` に置き換えます。
8. ファイルを保存して閉じます。
9. 更新した `file-servers-custom.xml` ファイルを、`contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension` にあるアーカイブにコピーします。
10. `contentservices.war` ファイルを保存します。

注意： EAR ファイルを更新した後で、LiveCycle Configuration Manager を使用して、更新した EAR ファイルをデプロイする必要があります。

4.22 Connector for IBM Content Manager の設定

注意： LiveCycle ES2 でサポートされる IBM Content Manager のバージョンは、8.4 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM Content Manager サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、IBM Content Manager データストアに接続するようサービスを設定します。

▶ Connector for IBM Content Manager を設定するには

1. [appserverdomain] フォルダで `adobe-component-ext.properties` ファイルを開きます。ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します。
2. 次の IBM II4C JAR ファイル、IBM II4C プロパティファイルを含む Config フォルダ、DB2 Universal Database Client インストールの ZIP ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
 - `cmb81.jar`
 - `cmbcm81.jar`
 - `cmbicm81.jar`
 - `cmblog4j81.jar`
 - `cmbsdk81.jar`
 - `cmbutil81.jar`
 - `cmbutilicm81.jar`
 - `cmbview81.jar`
 - `cmbwas81.jar`
 - `cmbwcm81.jar`
 - `cmgmt`

注意： `cmgmt` は JAR ファイルではありません。Windows では、このフォルダはデフォルトで `C:/Program Files/IBM/db2cmv8/` にあります。

- `common.jar`
- `db2jcc.jar`

- db2jcc_license_cisuz.jar
- db2jcc_license_cu.jar
- ecore.jar
- ibmjgsprovider.jar
- ibmjsseprovider2.jar
- ibmpkcs.jar
- icmrm81.jar
- jcache.jar
- log4j-1.2.8.jar
- xerces.jar
- xml.jar
- xsd.jar

新しいシステムプロパティは、次のような構造になります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの DB2 Universal Database Client および I4C インストールを使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/cmgmt,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjsseprovider2.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjgsprovider.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmpkcs.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/xml.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbview81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmb81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xsd.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/common.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/ecore.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/jcache.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutil81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutilicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/icmrm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cu.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cisuz.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xerces.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmblog4j81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/log4j-1.2.8.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbSDK81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwas81.jar
```

3. アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

これで、IBMCConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use User Credentials」をログインモードとして使用して接続できます。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。

(オプション) IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use Credentials From Process Context」をログインモードとして使用して接続するには、次の手順を実行します。

▶ 「Use Credentials from process context」 ログインモードを使用して接続するには

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

http://[host]/:[port]/adminui

2. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名: administrator

パスワード: password

3. サービス / LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager / 環境設定をクリックします。
4. 必要なりポジトリ情報のすべてを入力して「保存」をクリックします。IBM Content Manager リポジトリ情報について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
5. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - IBM Content Manager Authorization サービス (IBMCMProviderService) を使用して IBM Content Manager データストアの内容を Workbench ES2 のプロセスビューで使用するには、この手順を続行します。IBM Content Manager Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、IBM Content Manager 秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - Workbench ES2 のプロセスビューで IBM Content Manager データストアからコンテンツを使用するために手順 4 で指定したシステム資格情報を使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の資格情報 (デフォルトは Administrator と password) を使用して Workbench ES2 にログインします。これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 4 で指定したシステム秘密鍵証明書は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
6. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定 / User Management / ドメインの管理をクリックします。
7. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意: LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

8. カスタム認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択し、「IBMCMAuthProviderService」を選択して、「OK」をクリックします。
9. LDAP 認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。
10. LDAP ディレクトリを追加します。
 - 「ディレクトリを追加」をクリックします。
 - 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。

- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。(オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

上記の設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

11. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。
12. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。
13. 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。
14. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
15. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。
 - 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
 - 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

16. Workbench ES2 を起動し、IBM Content Manager データストア用の次の秘密鍵証明書を使用してログインします。

ユーザー名: [username]@[repository_name]

パスワード: [password]

これで、IBMCMConnectorService オーケストレーション可能コンポーネントのログインモードが「Use Credentials from process context」と選択されている場合に、Workbench ES2 のプロセスビューで IBM Content Manager データストアを使用できます。

Connector for IBM Content Manager サービスを設定したら、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.23 Business Activity Monitoring ES2 のアップグレードおよびデプロイ

LiveCycle ES (8.x) ソリューションの一部として Business Activity Monitoring (BAM) をインストールした場合、次のタスクを実行して、LiveCycle ES2 で BAM が機能することを確認する必要があります。

▶ Business Activity Monitoring ES2 のインストールおよび設定:

1. Business Activity Monitoring ES2 の手動インストールを実行します。使用しているアプリケーションサーバー版の [LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ](#) ガイドを参照してください。
2. 次の手順で BAM の設定を変更します。
 - Web ブラウザを開き、http://[host]:[port]/adminui と入力して LiveCycle 管理コンソールにログインします。
 - サービス / LiveCycle Process Management ES2 / サーバー設定 / BAM の設定を選択します。

- 使用している BAM サーバーに合わせて、「BAM ホスト」、「BAM ポート」、「LiveCycle サーバーホスト」および「LiveCycle サーバー SOAP ポート」の値を変更します。
- 「ユーザー名」を「CognosNowAdmin」に変更し、「保存」をクリックします。
- LiveCycle ES2 サーバーを再起動します。

▶ **すべてのデータストリームの無効化と有効化：**

1. Web ブラウザを開き、`http://[host]:[BAM port]/bam/workbench` と入力して BAM Workbench にログインします。
2. 「Workbench」タブの「Public Folders」をクリックし、「Data Stream AdobeEvent」を見つけ、「AdobeEvent」を選択します。「Activities」リストで「Disable」をクリックし、ポップアップダイアログの「Disable Dependencies」をクリックします。
3. 「AdobeEvent」を選択し、「Activities」リストの「Enable」をクリックし、ポップアップダイアログの「Enable All」をクリックします。
4. 他のすべてのデータストリームについて、手順 2 および 3 を繰り返します。

▶ **LiveCycle ES (8.x) BAM メタデータの読み込み：**

1. アップグレードを実行する前に書き出した LiveCycle ES (8.x) BAM メタデータ JAR ファイルを探します。
『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』ガイドの「Business Activity Monitoring ES2 メタデータの書き出しとバックアップ」を参照してください。
2. 「Administration Console」タブを開き、「Import/Export」をクリックします。
3. 「Import metadata from a JAR file (upload)」を選択し、「Browse」をクリックして書き出したメタデータの JAR ファイルを探します。
4. Import Mode / Do not overwrite を選択し、「OK」をクリックします。

LiveCycle ES (8.x) プロセスデータが、LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 に表示されます。

注意： LiveCycle ES2 では、一部の LiveCycle ES (8.x) オブジェクトが推奨されていません。これらのオブジェクトは、BAM Workbench には表示されません。

4.24 アップグレード後の作業ファイルの削除

アップグレードの際、LiveCycle ES (8.x) データベースから情報が抽出され、作業ファイルに書き込まれます。その後、この作業ファイルから情報が LiveCycle ES2 データベースに移行されます。データ移行の完了後、このファイルは `[LiveCycleES2 root]/configurationManager/working/upgrade` ディレクトリに残っています。

アップグレードが完了したら、これらのファイルの大半は不要になります。アップグレードされた LiveCycle ソリューションコンポーネントによっては、一部のデータにパスワードやドキュメントの暗号キーなど機密性の高い情報が含まれている場合もあります。ディスク領域を節約し、システムのセキュリティを維持するには、アップグレードの完了（必須データおよび必須ではないデータの移行）を確認した後、このディレクトリのファイルのほとんどを削除します。これにより、LiveCycle ES2 が予想どおりに作業するようにします。

`[LiveCycleES2 root]/configurationManager/working/upgrade` ディレクトリに移動し、sharedData ファイル以外のすべてのファイルを削除します。

4.25 システムイメージバックアップの実行

実稼働環境に LiveCycle ES2 をインストールおよびデプロイした後、このシステムを稼働する前に、LiveCycle ES2 を実装したサーバーのシステムイメージバックアップを実行することをお勧めします。このバックアップには、LiveCycle ES2 のデータベース、GDS ディレクトリおよびアプリケーションサーバーを含める必要があります。これは、ハードドライブまたはコンピュータ全体が動作しなくなった場合に、コンピュータの内容の復元に使用できる完全なシステムバックアップです。[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「LiveCycle ES2 のバックアップおよび回復」トピックを参照してください。

4.26 LiveCycle ES2 のアンインストール

[Livecycle ES2 root] ディレクトリにあるアンインストーラでは、LiveCycle ES2 インストーラで作成されたファイルおよびアプリケーションが削除されます。ただし、アンインストーラでは、アプリケーションサーバーにデプロイされた LiveCycle 以外のカスタムアプリケーションのフォルダやファイルは削除されません。アンインストール中に一部のフォルダが削除されない場合は、システムを再起動して、削除されていないフォルダを手動で削除してください。

注意： コマンドラインインターフェイス (CLI) から LiveCycle ES2 をインストールした場合は、CLI を使用して LiveCycle ES2 をアンインストールする必要があります。[「付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール」 \(74 ページ\)](#) を参照してください。

警告： アンインストーラを実行すると、製品インストールディレクトリ内のすべての内容が警告メッセージなしに削除されます。操作を進める前に、保存しておく必要があるデータのバックアップを作成してください。

▶ コンピュータからファイルを削除するには

1. アンインストールプログラムを起動します。

- (Windows) 次のいずれかを実行します。
 - Windows のコントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して、Adobe LiveCycle ES2 を削除します。
 - 手動アンインストール：
 - アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します：
[LiveCycleES2 root]¥Uninstall_Adobe LiveCycle ES2
 - Uninstall Adobe LiveCycle ES2.exe ファイルをダブルクリックします。
- (UNIX) 次の操作を実行します。
 - 端末から、アンインストールスクリプトが格納されているディレクトリに移動します：
cd /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2/Uninstall_Adobe LiveCycle ES2
 - ./Uninstall Adobe LiveCycle ES2 と入力します (コマンドを chmod 777 のように入力して、このバイナリを実行ファイルにする必要がある場合があります)。

注意： (UNIX) アンインストールスクリプトが格納されているディレクトリ (Uninstall_Adobe LiveCycle ES2) に移動して、そのスクリプトを実行します。ディレクトリ名にスペースが含まれているため、製品をアンインストールするには、ディレクトリの完全パスをコマンドの一部として含める必要があります。

2. アンインストールプログラムの画面の指示に従い、「完了」をクリックします。

3. LiveCycle ES2 を再インストールする場合は、[LiveCycleES2 root] ディレクトリに残っているディレクトリおよびファイルをすべて削除してください。

5

トラブルシューティング

LiveCycle ES2 のインストールおよび設定のトラブルシューティングについて詳しくは、『[LiveCycle ES2 のトラブルシューティング](#)』ガイドを参照してください。

A

付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール

LiveCycle ES2 には、インストールプログラム用のコマンドラインインターフェイス (CLI) が用意されています。CLI は、LiveCycle ES2 の上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。CLI はコンソールモードで実行します。1つのインタラクティブセッションで、すべてのインストール操作を行うことができます。

CLI インストールオプションを使用してモジュールをインストールする前に、次の点を確認してください。

- LiveCycle ES2 の実行に必要なソフトウェアおよびハードウェアが使用環境に含まれている。
- 必要な環境が整っている (『[LiveCycle 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』を参照)。
- [「製品ファイルのインストール」](#) (14 ページ) の最初のページと [「LiveCycle ES2 モジュールのインストール」](#) (13 ページ) に目を通した。

この付録には、以下のトピックが含まれています。

- [「LiveCycle ES2 のインストール」](#) (74 ページ)
- [「エラーログ」](#) (76 ページ)
- [「コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール」](#) (76 ページ)
- [「次の手順」](#) (77 ページ)

A.1 LiveCycle ES2 のインストール

ここでは、LiveCycle ES2 の初期のインストールについて説明します。設定およびデプロイメントについては、[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」](#) (19 ページ) や [「付録 - LCM コマンドラインインターフェイス」](#) (78 ページ) を参照してください。

注意： デプロイメントの際の権限の問題を回避するため、LiveCycle ES2 インストール CLI および LiveCycle Configuration Manager を実行する際には、アプリケーションサーバープロセスを実行するユーザーとしてログインしてください。

インストールプロセスを開始したら、画面の指示に従ってインストールオプションを選択します。各プロンプトに応答しながらインストールを進めてください。前の手順で選択した内容を変更する場合は、back と入力します。quit と入力すれば、いつでもインストールをキャンセルできます。

▶ LiveCycle ES2 をインストールするには

1. コマンドプロンプトを開き、実行可能なインストーラが含まれるインストールメディアまたはハードディスクのフォルダに移動します。
 - (Windows) livecycle_server¥9.0¥Disk1¥InstData¥Windows¥VM
 - (Windows 64 ビット版) livecycle_server¥9.0¥Disk1¥InstData¥Windows_64bit¥VM
 - (Linux) livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Linux/NoVM
 - (Solaris) livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Solaris/NoVM

2. コマンドプロンプトを開いて、次のコマンドを実行します。

- (Windows) `install.exe -i console`
- (Linux、Solaris) `./install.bin -i console`

注意： `-i console` オプションを指定せずにコマンドを入力すると、GUI ベースのインストーラが起動します。

3. 次の表の説明に従って、プロンプトに応答します。

プロンプト	説明
Choose Locale	インストールで使用するロケールを値 1 ~ 2 を入力して選択します。デフォルト値を選択するには、 Enter キーを押します。 English、または日本語を選択できます。デフォルトの言語は日本語です。
Update Installation	インストールオプションを選択して、 Enter キーを押します。Perform Update または Skip Update を選択できます。 インストーラによって LiveCycle の以前のインストールが検出された場合、既存のインストールを更新できます。更新インストールでは、現在のインストールで役立つように既存のインストールの情報が使用されます。
Choose Install Folder	Destination 画面で、 Enter キーを押してデフォルトディレクトリを使用するか、新しいインストールディレクトリの場所を入力します。 デフォルトのインストールフォルダは次のとおりです。 (Windows) : C:\¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2 (Linux、Solaris) : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2 注意： ディレクトリ名にアクセント記号付きの文字を使用しないでください。アクセント記号付きの文字を使用すると、CLI によってアクセントが無視され、アクセント記号付きの文字が変更されてからディレクトリが作成されます。
LiveCycle ES2 Server License Agreement	Enter キーを押して、使用許諾契約のページに目を通します。 契約に同意する場合は、 <code>Y</code> を入力し、 Enter キーを押します。
Pre-Installation Summary	選択したインストール内容を確認し、その内容でインストールを続行する場合は Enter キーを押します。 前の手順に戻って設定を変更するには、 <code>back</code> と入力します。
Ready To Install	インストーラによりインストールディレクトリが表示されます。 Enter キーを押すと、インストールプロセスが開始します。インストール中、進行状況バーによりインストールの進行状況が示されます。 設定を変更する場合は <code>back</code> と入力します。 <code>quit</code> と入力すると、インストールが終了します。
Installing	インストールの進行状況が示されます。

プロンプト	説明
LiveCycle Configuration Manager	<p>Enter キーを押すと、LiveCycle ES2 のインストールが完了します。</p> <p>LiveCycle Configuration Manager を実行するには、次のスクリプトを呼び出します。</p> <p>(Windows) :</p> <pre>C:¥Adobe¥Adobe Livecycle ES2¥configurationManager¥bin¥ConfigurationManager.bat</pre> <p>(Linux、Solaris) :</p> <pre>/opt/adobe/adobe_livecycle_es2/ configurationManager/bin/ConfigurationManager.sh</pre>
Installation Complete	<p>インストールの完了画面にインストールのステータスと場所が表示されます。</p> <p>Enter キーを押すと、インストーラが終了します。</p> <p>Adobe LiveCycle ES2 を適切にアンインストールするには、<code>-i console</code> フラグを使用してコマンドラインからアンインストーラを実行します。</p>

A.2 エラーログ

エラーが発生した場合は、次のインストールのログディレクトリで `Adobe_LiveCycle_ES2_InstallLog.log` を確認できます。

- (Windows) `C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥log`
- (Linux、Solaris) `/opt/adobe/adobe_livecycle_es2/log`

インストール中に発生するおそれのあるエラーについて詳しくは、適切なトラブルシューティングガイドを参照してください。

A.3 コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール

コマンドラインオプションを使用して LiveCycle をインストールした場合は、コマンドラインからアンインストーラを実行するだけで Adobe LiveCycle ES2 をアンインストールできます。サイレントアンインストールを実行する場合は、「`-i console`」フラグを省略します。

次の操作を実行します。

1. コマンドプロンプトを開き、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリに移動します。

注意： UNIX システムの場合は、ディレクトリ名にスペースが含まれているので、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリには手動で移動する必要があります。

- (Windows) `cd C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥Uninstall_Adobe LiveCycle ES2`
- (Linux、Solaris) `cd /opt/adobe/adobe_livecycle_es2
/Uninstall_Adobe LiveCycle ES2`

2. プロンプトで次のコマンドを入力し、Enter キーを押します。

- (Windows) `Uninstall Adobe LiveCycle ES2.exe -i console`
- (Linux、Solaris) `./Uninstall Adobe LiveCycle ES2 -i console`

注意： `-i console` オプションを指定せずにアンインストールコマンドを入力すると、サイレントアンインストールが実行されます。

3. 画面の指示に従って操作します。

プロンプト	説明
Uninstall Adobe LiveCycle ES2	Enter キーを押すと、アンインストールが続行します。 quit と入力すると、アンインストールプログラムが終了します。 アンインストールプログラムを開始した後に、前の手順に戻って変更を加えるには、 back と入力します。
Uninstalling... Uninstall Complete	アンインストールが開始したら、残りのアンインストールプロセスが完了し、カーソルがプロンプトに戻ります。 一部の項目については削除されない可能性があります。また、LiveCycle ES2 のインストール後に作成されたフォルダは削除されません。これらのファイルやフォルダは手動で削除する必要があります。

A.4 次の手順

デプロイする LiveCycle ES2 を設定する必要があります ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(19 ページ\)](#))
または [「付録 - LCM コマンドラインインターフェイス」 \(78 ページ\)](#) を参照)。

LiveCycle ES2 には、LiveCycle Configuration Manager 用のコマンドラインインターフェイス (CLI) が用意されています。LiveCycle ES2 の上級ユーザーを対象としている CLI は、例えば LiveCycle Configuration Manager のグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用します。この章では、CLI を使用して LiveCycle ES2 を構成する方法について説明します。

- [「操作の順序」 \(78 ページ\)](#)
- [「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#)
- [「一般的な構成コマンド」 \(87 ページ\)](#)
- [「使用例」 \(98 ページ\)](#)
- [「エラーログ」 \(98 ページ\)](#)

B.1 操作の順序

LiveCycle Configuration Manager CLI は、GUI バージョンの LiveCycle Configuration Manager と同じ順序で操作する必要があります。CLI は以下の順序で操作してください。

1. JBoss for LiveCycle ES (8.x) をシャットダウンします (自動オプションのみ)。
2. GDS ディレクトリの内容を移行します (自動オプションのみ)。
3. データソースを移行します (自動オプションのみ)。
4. LiveCycle ES2 を構成します。
5. LiveCycle 7.x 互換レイヤーを適用します。
6. LiveCycle ES (8.x) EAR ファイルから情報を抽出し、LiveCycle ES2 EAR ファイルを設定します。
7. アプリケーションサーバポートポロジを検証します。
8. データベース接続を検証します。
9. アプリケーションサーバーを構成します (WebSphere および WebLogic のみ)。
10. アプリケーションサーバーの構成を検証します。
11. LiveCycle ES2 をデプロイします。
12. LiveCycle ES2 を初期化します。
13. Business Activity Monitoring ES2 を初期化します。
14. LiveCycle ES2 サーバーを検証します。
15. LiveCycle ES2 モジュールをデプロイします。
16. 7.x 互換レイヤーを LiveCycle ES2 モジュールと共にデプロイします。
17. LiveCycle ES2 に移行する LiveCycle ES (8.x) フォームテンプレートを取得します。
18. デプロイメント後の構成を行います。

19. LiveCycle ES2 モジュールのデプロイメントを検証します。
20. PDF Generator ES2 のシステム準備設定を確認します。
21. PDF Generator ES2 の管理者ユーザーを追加します。
22. LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager を構成します。
23. LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet を構成します。
24. LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum を構成します。
25. LiveCycle ES2 Connectors for ECM の構成をすべてテストします。
26. Content Services ES2 を構成します。

警告： LiveCycle Configuration Manager CLI の操作を完了したら、WebLogic Server を再起動する必要があります。

B.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル

LiveCycle Configuration Manager CLI には、LiveCycle 環境用に定義したプロパティを含む 2 つのプロパティファイルが必要です。プロパティファイルのテンプレートである `cli_propertyFile_template.txt` および `cli_propertyFile_upgrade_template.txt` は、`[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin` フォルダにあります。`cli_propertyFile_template.txt` には、LiveCycle ES2 のインストールシナリオと構成シナリオに適用されるプロパティ全般が格納されています。`cli_propertyFile_upgrade_template.txt` には、アップグレードタスク専用のプロパティが格納されています。どちらも LiveCycle ES (8.x) からのアップグレードが必要です。これらのファイルのコピーを作成して、値を編集する必要があります。このファイルは、使用する LiveCycle Configuration Manager の操作に基づいてカスタマイズできます。次の節で、必要なプロパティとその値について説明します。

プロパティファイルは、インストールの状態に応じて作成する必要があります。次のいずれかの方法を使用します。

- プロパティファイルを作成し、インストールシナリオおよび構成シナリオに応じて値を設定します。
- プロパティファイル `cli_propertyFile_template.txt` をコピーして、使用する LiveCycle Configuration Manager 操作に基づいて値を編集します。
- LiveCycle Configuration Manager の GUI を使用し、GUI バージョンによって作成されたプロパティファイル CLI バージョンのプロパティファイルとして使用します。`[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin/configurationManager.bat` ファイルを実行すると、`userValuesForCLI.properties` ファイルが `[LiveCycleES2 root]/configurationManager/config` ディレクトリに作成されます。このファイルを LiveCycle Configuration Manager CLI の入力として使用できます。

注意： CLI プロパティファイルでは、Windows パスのディレクトリセパレータ (`¥`) にエスケープ文字 (`¥¥`) を使用する必要があります。例えば、指定する Fonts フォルダが `C:¥Windows¥Fonts` である場合、LiveCycle Configuration Manager CLI スクリプトでは `C:¥¥Windows¥¥Fonts` と入力する必要があります。

B.3 LiveCycle ES (8.x) コマンドのアップグレード

B.3.1 (自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) JBoss のシャットダウンコマンド

`upgrade8-shutdownESJboss` コマンドは、LiveCycle ES (8.x) の自動インストールでインストールされた JBoss サービスをシャットダウンし、サービス実行モードを「手動」に設定します。

このコマンドに必要なプロパティはありません。

B.3.2 (自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) GDS の移行コマンド

`upgrade8-migrateGDS` コマンドは、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリの内容を LiveCycle ES (8.x) GDS のデフォルトの場所から LiveCycle ES2 GDS のデフォルトの場所に移行します。

このコマンドは、自動インストールが指定され、かつデフォルト GDS が使用されている場合にのみ機能します。カスタム GDS が使用されている場合は、内容を手動で移行する必要があります。また、このコマンドは、Connectors for ECM プロパティファイル LiveCycle ES (8.x) JBoss の bin ディレクトリから JBoss の新しい場所に移行します。アップグレードされる LiveCycle ES (8.x) システムが以前に LiveCycle 7.x からアップグレードされた場合は、さらに `adobe-bmc-client.jar` ファイルが `[JBoss root]/server/lc_turnkey/lib` ディレクトリにコピーされます。

このコマンドに必要な入力プロパティはありません。

B.3.3 (自動オプションのみ) LiveCycle ES (8.x) データソースの移行コマンド

`upgrade8-migrateDataSources` コマンドは、JBoss `/server/all/deploy` ディレクトリの `adobe-ds.xml` または `mysql-ds.xml` データソースファイルに追加されたカスタムデータソース定義を移行します。カスタムデータソースが定義されていない場合は、このコマンドをスキップします。

`upgrade8-migrateDataSources` コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
<code>adobeDSDataSourcesToMigrate</code>	LiveCycle ES (8.x) <code>adobe-ds.xml</code> ファイルから移行する必要があるカスタムデータソースの JNDI_NAME のカンマ区切りリスト。	不可	有
<code>mysqlDSDataSourcesToMigrate</code>	LiveCycle ES (8.x) <code>mysql-ds.xml</code> ファイルから移行する必要があるカスタムデータソースの JNDI_NAME のカンマ区切りリスト。	不可	有

B.3.4 7.x 互換レイヤーの適用コマンド

apply7compatibility-configure コマンドは、LiveCycle 7.x 互換レイヤーを LiveCycle ES2 EAR ファイルに挿入します。このコマンドが必要であるのは、LiveCycle 7.x 互換レイヤーを必要とする場合のみです。

apply7compatibility-configure コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	値の例	説明	必須	空の値
productsToUpgrade	assembler barcodedforms documentsecurityserver formmanager forms pdfgenerator policyserver print readerextensions workflow watchedfolder	LiveCycle ES2 EAR ファイルに統合する製品のリスト。	有	不可
livecycleESCoreEARPath		LiveCycle ES (8.x) コア EAR ファイルの adobe-livecycle-<アプリケーションサーバー>.ear のパス。以前のインストールから取得するか、LiveCycle ES (8.x) アプリケーションサーバーから書き出します。	不可	有
livecycleESNativeEARPath		LiveCycle ES (8.x) ネイティブ EAR ファイルの adobe-livecycle-native-<アプリケーションサーバー>-<OS>.ear のパス。以前のインストールから取得するか、LiveCycle ES (8.x) アプリケーションサーバーから書き出します。	不可	有

B.3.5 LiveCycle ES (8.x) EAR ファイルからの情報の抽出コマンド

`upgrade8-configurePreDeploy` コマンドは、LiveCycle ES (8.x) EAR ファイルから情報を抽出し、LiveCycle ES2 EAR ファイルをデプロイ前に設定します。

`upgrade8-configurePreDeploy` コマンドでは以下のプロパティが必要です。

プロパティ	説明	必須	空の値
<code>prevLCVersion</code>	アップグレードが実行される LC のバージョン。LC8.0.1.x または LC8.2.1.x の値を指定できます。	有	不可
<code>excludedSolutionComponents</code>	インストールされない LC LFS のカンマ区切りリスト。これは、インストール (ライセンス) されているソリューションコンポーネントを GUI で選択解除することと同等です。	不可	有

B.3.6 7.x 互換レイヤーのデプロイ

`apply7compatibility-deployComponents` コマンドは、LiveCycle 7.x 互換レイヤーを LiveCycle ES2 サーバーにデプロイします。

このコマンドが必要であるのは、LiveCycle 7.x API 互換性が必要である場合のみです。

警告：既に `apply7compatibility-configure` コマンドを実行した場合は、このコマンドを実行する必要はありません。

`apply7compatibility-deployComponents` コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
<code>productsToUpgrade</code>	互換レイヤーを LiveCycle ES2 にデプロイする製品のリスト。	有	不可
<code>LCHost</code>	LiveCycle ES2 サーバーがインストールされているホストのホスト名。	有	不可
<code>LCPort</code>	LiveCycle ES2 アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。	有	不可
<code>LCAdminUserID</code>	LiveCycle ES2 管理者ユーザーのユーザー名。	有	不可
<code>LCAdminPassword</code>	LiveCycle ES2 管理者ユーザーのパスワード。プロパティファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	不可	有

B.3.7 移行する LiveCycle ES (8.x) フォームテンプレートの取得コマンド

upgrade8-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用すると、ECM リポジトリから LiveCycle ES2 ネットワークリポジトリに移行できるフォームテンプレートのリストを取得できます。

注意： LiveCycle フォームテンプレートの格納に ECM リポジトリを使用することは推奨されなくなるため、この移行は必須です。

リストが取得されたら、upgrade8-configurePostDeploy コマンドを使用して実際にリストからテンプレートを移行します。このコマンドをスキップして upgrade8-configurePostDeploy コマンドで skipFormTemplatesImport プロパティを true に設定すると、フォームテンプレートの移行をスキップできます。

upgrade8-getFormTemplatesToMigrate コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレードされる LiveCycle ES (8.x) のバージョン。LC8.0.1.x または LC8.2.1.x の値を指定できます。	有	不可
excludedSolutionComponents	インストールされないコンポーネントのカンマ区切りリスト。これは、インストール (ライセンス) されているソリューションコンポーネントを GUI で選択解除することと同等です。	不可	有
jboss.clientjar.location	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。	有	有

LiveCycle ES2 ホストおよび認証の情報

プロパティ	説明	必須	空の値
LCHost	LiveCycle ES2 サーバーがインストールされているホストのホスト名。	有	不可
LCPort	LiveCycle ES2 アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。	有	不可
lc8JndiPort	LiveCycle ES2 アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。	有	不可
localServer.appServerRootDir	アプリケーションサーバーのクライアント JAR ファイルにアクセスするために使用されます。WebLogic および WebSphere の場合のみ、ローカルアプリケーションサーバーのルートディレクトリが必要です。	有	有
LCAdminUserID	LiveCycle ES2 管理者ユーザーのユーザー名。	有	不可
LCAdminPassword	管理者ユーザーのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	不可	有

LiveCycle ES2 データベースの情報

プロパティ	説明	必須	空の値
lc8DatabaseType	LiveCycle ES2 用に設定されているデータベースの種類。mysql、db2、oracle または sqlserver の値を指定できます。	有	不可
lc8DatabaseHostName	LiveCycle ES2 データベースのホスト名。	有	不可
lc8DatabasePortNumber	LiveCycle ES2 データベースによって使用されるポート。	有	不可
lc8DatabaseDriverFile	データベースのドライバファイルのパス。	有	不可
lc8DatabaseUserName	データベースにアクセスするためのユーザー名。	有	不可
lc8DatabaseName	データベース名。デフォルトは adobe です。	有	不可
lc8DatabaseUserPassword	データベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	不可	有

ECM フォームテンプレートの移行プロパティ

プロパティ	説明	必須	空の値
documentumFormTemplatesFile	ECM Documentum から移行できるフォームテンプレートのリストが書き込まれるファイル。後でこのファイルを upgrade8-configurePostDeploy コマンドに対する入力として使用できます。	省略可能	可
filenetFormTemplatesFile	IBM FileNet から移行できるフォームテンプレートのリストが書き込まれるファイル。後でこのファイルを upgrade8-configurePostDeploy コマンドに対する入力として使用できます。	省略可能	可

B.3.8 LiveCycle サーバーのアップグレードコマンド

upgrade8-configurePostDeploy コマンドは、システムの実際のアップグレードを行います。LiveCycle ES2 EAR ファイルおよびモジュールがデプロイされた後で実行されます。

upgrade8-configurePostDeploy コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレードされる LiveCycle ES (8.x) のバージョン。LC8.0.1.x または LC8.2.1.x の値を指定できます。	有	不可
excludedSolutionComponents	インストールされない LiveCycle ES (8.x) コンポーネントのカンマ区切りリスト。これは、インストール (ライセンス) されているソリューションコンポーネントを GUI で選択解除することと同等です。	不可	有
jboss.clientjar.location	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。	有	有

LiveCycle ES2 ホストおよび認証の情報

プロパティ	説明	必須	空の値
LCHost	LiveCycle ES2 サーバーのホスト名。	有	不可
LCPort	LiveCycle ES2 サンプルアプリケーションサーバーのポート番号。	有	不可
lc8JndiPort	LiveCycle ES2 アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。	有	不可
localServer.appServerRootDir	アプリケーションサーバーのクライアント JAR ファイルにアクセスするために使用されます。WebLogic および WebSphere の場合のみ、ローカルアプリケーションサーバーのルートディレクトリが必要です。	有	有
LCAdminUserID	LiveCycle ES2 管理者ユーザーのユーザー名。	有	不可
LCAdminPassword	管理者ユーザーのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	不可	有

LiveCycle ES2 データベースの情報

プロパティ	説明	必須	空の値
lc8DatabaseType	LiveCycle ES2 用に設定されているデータベースの種類。mysql、db2、oracle または sqlserver の値を指定できます。	有	不可
lc8DatabaseHostName	LiveCycle ES2 データベースのホスト名。	有	不可
lc8DatabasePortNumber	LiveCycle ES2 データベースのポート番号。	有	不可
lc8DatabaseDriverFile	LiveCycle ES2 データベースのドライバファイルのパス。	有	不可
lc8DatabaseUserName	LiveCycle ES2 データベースにアクセスするためのユーザー名。	有	不可
lc8DatabaseName	LiveCycle ES2 データベースの名前。デフォルトは adobe です。	有	不可
lc8DatabaseUserPassword	データベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	不可	有

ECM フォームテンプレートの移行プロパティ

プロパティ	説明	必須	空の値
skipFormTemplatesImport	ECM リポジトリから LiveCycle ES2 ネイティブリポジトリにフォームテンプレートを読み込むか、この手順をスキップするかを指定します。false に設定した場合、移行するテンプレート名のリストを含むテンプレートファイル（次の2つのプロパティを参照）を指定する必要があります。	不可	有
documentumFormTemplatesFile	EMC Documentum リポジトリから LiveCycle ES2 ネイティブリポジトリに移行するフォームテンプレートのリストを含むファイル。このファイルは、upgrade8-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用して生成します。	不可	有
filenetFormTemplatesFile	IBM FileNet リポジトリから LiveCycle ES2 ネイティブリポジトリに移行するフォームテンプレートのリストを含むファイル。このファイルは、upgrade8-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用して生成します。	省略可能	可

B.4 一般的な構成コマンド

B.4.1 共通のプロパティ

共通のプロパティは次のとおりです。

WebLogic および WebSphere 固有のプロパティ：アプリケーションサーバーの設定、LiveCycle のデプロイ、アプリケーションサーバートポロジおよびアプリケーションサーバー設定の検証操作に必要です。

LiveCycle サーバー固有のプロパティ：LiveCycle の初期化と LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作に必要です。

以下の操作に必要なプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle ES2 を初期化する
- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする。

プロパティ	値	説明
WebLogic 固有のプロパティ		
targetServer.topologyType	server または cluster	LiveCycle ES2 にデプロイするアプリケーションサーバートポロジの種類。
targetServer.name	文字列	アプリケーションサーバーノードまたはクラスタに割り当てられた名前。
targetServer.adminHost	文字列 デフォルトは localhost です。	WebLogic アプリケーションサーバーがインストールされているサーバーのホスト名。
targetServer.adminPort	整数	WebLogic 管理サーバーが要求をリスンするポートのポート番号。
targetServer.adminUserID	文字列	WebLogic アプリケーションサーバーへのアクセスに使用する管理ユーザー ID。
targetServer.adminPassword	文字列	WebLogic 管理ユーザー ID に関連付けられているパスワード。

プロパティ	値	説明
localServer.appServerRootDir	デフォルト : (Windows) WebLogic 10g Server 10.3 C:\bea\wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 10g Server 10.3 /opt/bea/wlserver_10.3 (Windows) WebLogic 11g Server 10.3 C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 10g Server 10.3 /opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3	ローカルに構成するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle ES2 をデプロイしたり、LiveCycle ES2 をデプロイするリモートサーバーと通信するために使用したりするディレクトリ)。
targetServer.appServerRootDir	デフォルト : (Windows) WebLogic 10g Server 10.3 C:\bea\wlserver_10.3 (Windows) WebLogic 11g Server 10.3 C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 10g Server 10.3 /opt/bea/wlserver_10.3 (Linux、Solaris) WebLogic 11g Server 10.3 /opt/Oracle/Middleware/wlserver_10.3	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle ES2 をデプロイするディレクトリ)。
LiveCycle サーバー固有のプロパティ		
LCHost	文字列	LiveCycle ES2 をデプロイするサーバーのホスト名。
LCPort	整数	LiveCycle ES2 のデプロイ先の Web ポート番号。

プロパティ	値	説明
excludedSolutionComponents	文字列。次の値がサポートされています。 ALC-LFS-Forms、 ALC-LFS-BusinessActivityMonitoring、 ALC-LFS-ConnectorEMCDocumentum、 ALC-LFS-ConnectorIBMFileNet、 ALC-LFS-ConnectorIBMContentManager、 ALC-LFS-ContentServices、 ALC-LFS-DigitalSignatures、 ALC-LFS-DataCapture、 ALC-LFS-Output、 ALC-LFS-PDFGenerator、 ALC-LFS-PDFGenerator3D、 ALC-LFS-ProcessManagement、 ALC-LFS-ReaderExtensions、 ALC-LFS-RightsManagement	(オプション) 構成しない LiveCycle ES2 モジュールを指定します。構成対象から除外するモジュールが複数ある場合はカンマで区切ります。

B.4.2 LiveCycle の構成プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle の構成操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
AdobeFontsDir	文字列	Adobe サーバーフォントディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
customerFontsDir	文字列	カスタマーフォントディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
systemFontsDir	文字列	システムフォントディレクトリの場所。複数のシステムフォントの場所は、セミコロンで区切って入力します。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスする必要があります。
LCTempDir	文字列	一時ディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。

プロパティ	値	説明
LCGlobalDocStorageDir	文字列	<p>グローバルドキュメントを保存するルートディレクトリ。</p> <p>長期間有効なドキュメントを保存したり、それらをすべてのクラスタノードで共有したりするために使用する、NFS 共有ディレクトリのパスを指定します。</p> <p>このプロパティは、LiveCycle ES2 コンポーネントをクラスタ環境にデプロイする場合にのみ指定します。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。</p>
EnableDocumentDBStorage	true または false デフォルト : false	<p>永続ドキュメントについて、データベースへのドキュメントの保存を有効または無効にします。</p> <p>データベースへのドキュメントの保存を有効にしても、GDS のファイルシステムディレクトリは必要です。</p>
enableFIPS	true または false デフォルト : false	<p>「FIPS を有効にする」オプションを選択すると、RSA BSAFE Crypto-J 3.5.2 暗号化モジュールと FIPS 140-2 検証証明書 #590 を使用して FIPS 140-2 承認済みアルゴリズムにデータ保護が制限されます。このオプションは、FIPS を実行する必要がある場合にのみ設定してください。</p>
Content Services ES2 のみ		
contentServices.rootDir	文字列	<p>[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] Content Services ES2 で使用するルートディレクトリを指定します。クラスタ環境で LiveCycle を実行している場合、クラスタ内のすべてのノードによって、すべてのノードにわたって同じパスでこのディレクトリが共有されている必要があります。</p>
contentServices.topology	文字列。SERVER または CLUSTER を指定します。 デフォルト : SERVER	<p>[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] シングルノードの場合は SERVER、クラスタ構成の場合は CLUSTER。</p>
contentServices.cifs.enable	true または false デフォルト : false	<p>[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS を有効または無効にします。</p>
contentServices.cifs.servername	文字列	<p>[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーのサーバー名。</p>

プロパティ	値	説明
contentServices.cifs.implementation	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● NetBIOS ● PureJava 	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーへの Content Services ES2 の接続方法を指定します。
contentServices.cifs.dllpath	文字列。 NetBIOS DLL のコピー元のパスを指定します。	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] NetBios DLL のコピー元のパス。「contentServices.cifs.implementation=NetBIOS」の場合は必須。このパスは環境内に存在している必要があります。
contentServices.cifs.alternateIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーの代替 IP アドレス。静的 IP である必要があります。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.WinsOrBrdcast	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● winsServer ● broadcast 	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] DNS 検索方法。「winsServer」または「broadcast」になります。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.winsPrmlIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] プライマリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig/all コマンドから取得できます。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.winsSecIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] セカンダリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig/all コマンドから取得できます。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer」の場合、これは必須フィールドです。

プロパティ	値	説明
contentServices.cifs.brdCastIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] ブロードキャスト IP アドレス。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」 および 「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=broadCast」 の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.dbType	文字列	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] Content Services のデータベースタイプ。

B.4.3 アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ

LiveCycle Configuration Manager では、LiveCycle ES2 の必要に応じて、WebLogic アプリケーションサーバーを構成および検証できます。

次の操作に適用されるプロパティを、以下の表に示します。

- アプリケーションサーバーの構成
- アプリケーションサーバートポロジの検証
- アプリケーションサーバー構成の検証
- データベース接続の検証

プロパティ	値	説明
WebLogic 固有のプロパティセクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(87 ページ) を参照してください。		
jvm.initialHeapSize	デフォルト： 512	JVM の初期ヒープサイズ (MB)。
jvm.maxHeapSize	デフォルト： 1792	JVM の最大ヒープサイズ (MB)。
WebLogic サーバーのコアクラスパス構成		
classpath.targetServer.java Home	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーの構成では、ターゲットアプリケーションサーバーの実行で使用する Java Home の場所を指定する必要があります。 このパスは、構成するサーバーからアクセスできる必要があります。
classpath.targetServer.pop3Jar Path	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーがアクセスできる Pop3 JAR ファイルのパス。このパスは、構成するサーバーからアクセスできる必要があります。

プロパティ	値	説明
データソース構成		
datasource.dbType	次のオプションから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ● oracle ● mysql ● db2 ● sqlserver 	LiveCycle ES2 で使用するよう構成するデータベースの種類。
datasource.dbName	文字列	データベースの名前。
datasource.dbHost	文字列	データベースがあるサーバーのホスト名または IP アドレス。
datasource.dbPort	整数	LiveCycle ES2 がデータベースとの通信に使用するデータベースポート。
datasource.dbUser	文字列	LiveCycle ES2 がデータベースへのアクセスに使用するユーザー ID。
datasource.dbPassword	文字列	データベースユーザー ID に関連付けられているパスワード。
datasource.target.driverPath	文字列	アプリケーションサーバーの lib ディレクトリ内の JDBC ドライバ。このパスは、構成するサーバーからアクセスできる、有効なパスである必要があります。
datasource.local.driverPath	文字列	ローカル JDBC ドライバ。この値は、直接データベース接続のテストにのみ使用します。

B.4.4 LiveCycle のデプロイプロパティ

以下のプロパティは LiveCycle ES2 のデプロイ操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(87 ページ) を参照してください。		
deployment.includeIVS	true または false	IVS EAR ファイルをデプロイメントに含めるかどうかを指定します。 警告： IVS EAR ファイルは実稼働環境に含めないようにすることをお勧めします。

B.4.5 LiveCycle の初期化プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle ES2 の初期化操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(87 ページ) を参照してください。		

B.4.6 BAM の初期化プロパティ

以下のプロパティは BAM の初期化操作にのみ適用されます。

注意： Business Activity Monitoring ES2 は、LiveCycle ES2 のオプションコンポーネントです。

プロパティ	値	説明
BAMHost	文字列	BAM をデプロイして実行するサーバーのホスト名。
BAMPort	整数	BAM サーバーが要求をリスンするポート番号。
BAMAdminUserID	文字列	BAM サーバーへの接続に使用する BAM 管理者ユーザー ID。
BAMAdminPassword	文字列	BAM サーバーへの接続に使用する BAM 管理者パスワード。
databaseType	次のオプションから選択します。 <ul style="list-style-type: none">oraclemysqldb2sqlserver	LiveCycle が BAM データのキャプチャに使用するデータベースの種類。

B.4.7 LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle コンポーネントのデプロイ
- LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証
- LiveCycle サーバーの検証

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(87 ページ) を参照してください。		
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、LiveCycle 管理コンソールへのログオンに使用されます。

プロパティ	値	説明
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、LiveCycle 管理コンソールへのログオンに使用されます。

B.4.8 コマンドラインインターフェイスの使用

プロパティファイルを構成したら、次のフォルダに移動する必要があります。
[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin フォルダ

LiveCycle Configuration Manager CLI のコマンドの詳細な説明を表示するには、
ConfigurationManagerCLI help <command name> と入力します。

B.4.8.1 LiveCycle の設定 CLI の使用

LiveCycle の構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。

B.4.8.2 アプリケーションサーバーの構成 CLI の使用

WebLogic のアプリケーションサーバーの構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureApplicationServer -targetServer_AdminPassword <password> -f <propertyFile> [-skip  
<configurationsToSkipList>]
```

説明：

- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer_AdminPassword プロパティが上書きされます。
- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -skip <configurationsToSkipList>：構成しないアプリケーションサーバーコンポーネントを指定できるオプションのパラメータです。構成対象から除外するコンポーネントが複数ある場合はカンマで区切ります。有効なオプションは、Datasource および Core です。

B.4.8.3 LiveCycle のデプロイ CLI の使用

LiveCycle のデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。

B.4.8.4 LiveCycle の初期化 CLI の使用

LiveCycle の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(79 ページ\)](#) を参照してください。

B.4.8.5 Business Activity Monitoring の初期化 CLI の使用

Business Activity Monitoring の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeBAM -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(79 ページ\)](#) を参照してください。

B.4.8.6 LiveCycle コンポーネントのデプロイ CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycleComponents -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.4.8.7 アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用

アプリケーションサーバートポロジの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerTopology -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.4.8.8 データベース接続の検証 CLI の使用

データベース接続の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateDBConnectivity -f <propertyFile> -datasource_dbPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -datasource_dbPassword <password> : コマンドラインでデータベースユーザーパスワードを設定できません。この引数を指定すると、プロパティファイルの datasource.dbPassword プロパティが上書きされます。

B.4.8.9 アプリケーションサーバー構成の検証 CLI の使用

アプリケーションサーバー構成の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerConfigurations -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.4.8.10 LiveCycle サーバーの検証 CLI の使用

LiveCycle サーバーの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleServer -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.4.8.11 LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleComponentDeployment -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(79 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.5 使用例

C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2\configurationManager\bin から次のコマンドを入力します。
ConfigurationManagerCLI configureLiveCycle -f cli_propertyFile.txt
cli_propertyFile.txt には、作成済みのプロパティファイルの名前を指定します。

B.6 エラーログ

エラーが発生した場合は、[LiveCycleES2 root]\configurationManager\log フォルダにある CLI エラーログで確認できます。生成されるログファイルには、命名規則に基づいて lcmCLI.0.log のような名前が付けられます。ファイル名の数字（ここでは 0）は、ログファイルがロールオーバーされるたびに増加します。

B.7 次の手順

LiveCycle Configuration Manager CLI を使用して LiveCycle ES2 の構成とデプロイを行った場合は、この時点で次の作業を実行できます。

- デプロイメントの確認 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(49 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールへのアクセス ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(36 ページ\)](#) を参照)。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle モジュールの構成 ([「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」\(50 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle ES2 のアンインストール ([「LiveCycle ES2 のアンインストール」\(72 ページ\)](#) を参照)。

デプロイメントのためのアプリケーションサーバーの構成を行っていない場合は、この時点でアプリケーションサーバーを構成する必要があります ([「LiveCycle ES2 のインストールの準備」](#) ガイドのアプリケーションサーバーの手動設定に関する付録を参照)。